新古改撰誌記　巻之拾

（朱書）
「五百六」
文化八未年四月
五役筆順
覚
場所高　黒鍬頭
百俵持扶持
同断　御掃除頭
百俵持扶持
同断　御中間頭
八拾俵持扶持
同断　御小人頭
八拾俵持扶持
同断　御駕籠頭
六拾俵持扶持

一、年始・五節句都而御規式之節者熨斗目麻上下着用仕候、七夕・八朔者白帷子麻上下着用仕候
但黒鍬頭・御掃除頭者平日当番之節者白衣ニ而相勤申候

五役組役順
御中間
御小人
御駕籠之者
黒鍬之者
御掃除之者

右之通御座候、已上
未四月

御中間高・役名・筆順・着服

一、御中間　羽織襠着勤
並高拾五俵壱人扶持　持高三拾俵より拾六俵迄
一、御中間組頭　自身羽織着
但持高
一、御供組頭　御役羽織着年始・五節句
但持高　御祝日麻上下着仕候
一、御籏指之者　御役羽織着
但持高之外役米拾五俵ツヽ
両丸
一、御中間目付　御役羽織着世話役者年始・五節句・御祝日麻上下着仕候
但持高
一、御中間押　御役羽織着
但持高
一、御持鎗之者　御役羽織着
但持高之外役米五俵半扶持ツヽ
両丸兼勤
一、御長屋御門番人　自分羽織之者年始・五節句・御祝日麻上下着仕候
但持高
一、新土戸番人　右同断
但持高

黒鍬之者頭
御掃除頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

一、大奥塀仕切土戸番人　右同断
　但持高
一、大奥御長屋御門番人　右同断
　但持高
一、同裏締戸番人　右同断
　但持高
一、御太鞁櫓下土戸番人　右同断
　但持高
一、二丸御長屋御門番人　右同断
　但持高
一、同御台所脇御長屋御門番人　右同断
　但持高
一、西丸御納戸口前番人　右同断
　但持高
一、同御台所口前番人　右同断
　但持高
一、同奥表仕切土戸番人　右同断
　但持高
一、同大奥御長屋御門番人　右同断
　但持高
一、同裏締戸番人　右同断
　但持高
一、御厩髪巻役　御役羽織之者
　但持高之外役米五俵半扶持
一、扶持賄役　自身羽織之者
　但持高
両丸
一、野方御使之者　御役羽織之者
　但持高
一、昼番之者　右同断
　但持高
一、定番之者　右同断
　但持高
一、触番之者　右同断
　但持高
右之通御座候、以上
　未四月　御中間頭
右大林方ニ而取調差出申候

（朱書）
「五百七」
文政元寅年十月左之書面小田又七郎より差越
黒鍬頭
御中間頭江
御小人頭
御小人目付拾弐人　銀九拾六匁
御使之者　拾八人　銀九拾匁
黒鍬之者　六　人　銀拾弐匁
右者八月廿七日上野
大猷院様
厳有院様　正遷座之節、雨天ニ而濡候ニ付為御手当書面之通被
浚明院様
下候旨駿河守殿被仰渡候、此段申渡候事
寅十月　羽太左京

（朱書）
「五百八」
文政四巳年二月紀伊守殿御口達ニ而被仰渡候
此節風邪流行此以前より者薄々相聞候ニ付、御薬者不被下候得
共願候者も有之候ハヽ、其段与左衛門殿江相願候様御同人被仰
渡候事

同年二月廿六日摂津守殿御渡四郎兵衛殿御達、左之両通小田切彦兵衛より差越五役承附同人江差返ス

此節病人多ニ付、御番衆其外ニ而も例と違詰切自分弁当之面々ハ此砌者御台所給さセ可申候

同断

此節一統風邪流行ニ付　御目見以下之者共御煎薬被下候、諸事享和二戌年之通相心得可被取計事

大目付
御目付　江口達之覚

此節風邪流行ニ付、押而詰居候輩廻り過候ハヽ勝手次第致退出可被申候

御湯漬御断

大草主膳

御持鑓之者　六人
御長刀役　弐人
御小道具之者　九人

右者煩多ニ付居残相勤候間、今廿六日御夜食被下候様御断被仰渡可被下候、以上

二月

御中間頭　古沢茂右衛門
御小人頭　近藤鯉右衛門

覚

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭　三人分

右御薬昨廿六日壱度頂戴仕候、以上

二月廿七日

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

別紙

覚

昨廿六日御薬頂戴仕候人数書

三拾三人分宛弐度

御中間組頭　壱人
御持鑓役　六人
野方御使　四人
昼番御用方　弐拾弐人
御長屋御門番　四人宛弐度
新土戸番　四人分宛弐度
奥仕切土戸番　弐人分宛弐度
御広敷御門番　六人分
同裏締戸番　三人分
御太鞍櫓下土戸番　六人分
二丸御長屋御門番　弐人分宛弐度
同脇御門番　弐人分

右之通頂戴仕候、以上

二月廿七日

一、今日源右衛門を以五役組一躰流行之風邪ニ被犯候者人数書

御城勤之者
弐百弐拾七人
風邪ニ而頼合罷在候者
六拾六人

御中間頭

右之通ニ御座候、以上
二月

覚

一、野方御使之者拾九人内
六人風邪
一、昼番御用除之者四拾五人内
拾四人風邪
一、御番所拾ヶ所人数七拾九人内
三拾七人同断
一、御持鑓役拾八人内
九人同断
右之通御座候、以上
二月

御中間頭

（朱書）
「五百九」
文政四巳年五月二日左之御書付駿河守殿御渡、御目付忠兵衛殿立
合与右（左）衛門殿被申渡候
御目付江

御中間
繁八郎弟
山田八五郎

右御中間江抱入可被申渡候、勤候内並之通御切米御扶持方被下
候間其段も可被申渡候

覚

此度御中間江抱入之者先達而新規抱入之節相達候通可被心得候

五月二日

（朱書）
「五百十」
文政五午年二月
（枠朱引）
摂津守殿
臨時
御納戸江御断

須田与左衛門
羽太左京

覚

一、熨斗目小袖　七ツ
但裏綿とも
一、綾縞小袖　壱
但裏綿共

御先練御中間
七人

御中間御供組頭
壱人

右者此度　御転任ニ付紅葉山　御宮幷上野・増上寺　御霊屋
江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、
御納戸江御断被仰渡可被下候、以上
午二月

御中間頭
三名

（枠朱引）
摂津守殿
（朱書）
「臨時」
御細工所江御断

須田与左衛門
羽太左京

覚

一、茶縮緬袷羽織　壱ツ
但紐共

御中間御供組頭
壱人
御中間目付
三拾四人

一、黒加賀絹袷羽織

一、黒絹単羽織　三拾六

右者此度　御転任ニ付紅葉山　御宮幷上野・増上寺　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

午二月

御中間頭　三名

御中間押　八人　△

御中間　三拾六人□

△

両ニ而目付六拾九人

内　中目付三拾四人外ニ掛り弐人加え
　小目付三拾五人同断五人加え

合　中目付三拾六人
　小目付四拾人

□

此人数以前之通
但加へ三人共

右二月廿一日柿沼より掛り江出し候処、目付人数相増候旨申聞候ニ付相紛候処、目付両にて六拾九人之内江掛り両ニ而七人共加へ有之候上へ、又候小ニ而五人、中ニ而弐人加へ候ニ付、先年より七人増候間両方とも相除此かた三拾四人ニ相成、小之方四拾人之内五人減し翌廿九日古沢より出ス

御転任
御任槐　掛り

御小人目付
金指惣内
加瀬彦市
中　神尾紀三郎

松本柳平　△
鈴木藤七
中　山崎孫三郎
小島珅吉

以上

掛り梶川より柿沼江談、書面者藤七より差出候由

△

御紙面之趣具ニ承知仕候、且　御本丸掛り之方組入呉候様申聞候上者御組入之方可然奉存候

一、西丸之方者御膳上御能掛り之由、左候得者御相談之通組込候方可然奉存候、御小人方も御座候儀ニ付西方御打合も相済候義与奉存候、右ニ付西丸諸請取物左金吾殿・小兵衛殿ニ而宜候哉、御月番ニ而宜候哉之旨三田より掛合御座候趣被仰下承知仕候、右者柿沼氏被申候通御月番之方可宜与奉存候

古沢

文化十三子年之振合者御中間目付三拾四人、此度者三拾六人弐人相増、此訳以前者加へ三人有之候処、此度者加へ相止メ本人弐人ニ直し候ニ付如此三拾六人ニ相成候、加へ有之候得者御用方之者病ニも可相成哉、此段思召御勘考可被下候、両ニ而目付七拾弐人ニ成

山崎

△

御書面加へ之方御尤ニ奉存候、平生　御成之節之加へ相雇候処、此度加へ無之も目付之方ニ人多故之儀とハ奉存候得

△
共、何れニも文化度之通加え両三人も差出、目付之方ニ而減
し候方可然奉存候　古沢

□
御同意奉存候、何れ加へ三人入候方可然右三人之儀、定蔵よ
り官兵衛へ談合置候方此度之　御成者加へ之出方者御中間方
計りニ而差出候由定蔵申聞候、猶定蔵江御問合且向方とも御
打合御取極可被下候　鈴木

○
文化十三子年ニ者御中間目付拾五人と有之、其節御当朝被仰
渡廉有之、別紙下ケ札之通故相減し　山崎

△
御下ケ札之通承知仕候、御用掛り弐人者掛り之方ニ而御断差
出請取候儀ニ者無之哉、御尋被成候様奉存候　古沢

□
御同意ニ奉存候　鈴木

○
単羽織子年ニハ数三拾六人と有之、此度者三人加へ之分相減
袷羽織弐人相増候儀有之候幷定蔵より内願御持鑓等江弐人相
増遣度段　思召可被下候　山崎

○
御書面御持鑓江弐人相増遣度段定蔵より内願も御座候趣、如
何相願候哉相弁へ不申候得とも右掛り弐人増候得者、御用方
御使抔も増人加へ不申候而者、非分之様ニも相聞不宜哉ニも奉
存候間、御持鑓役増之儀ハ不可然義と奉存候　古沢

△
御同意奉存候　鈴木

△
子年之通ニ御座候処定蔵内願ニ而弐人相増御持鑓等江遣度旨
申聞候御勘考猶又定蔵江御尋可被下候、此内江御能掛り弐人
入可申哉　山崎

△
御持鑓弐人増之儀者前同様奉存候、御能掛り・野方弐人者
御任槐掛りと違ひ掛りニ而ハ請取申間敷候間、御加へ被成候
方可然と奉存候　古沢

□
御同意ニ奉存候　鈴木

（枠朱引）
摂津守殿
西丸御用
臨時
西丸御納戸江御断

覚

一、熨斗目小袖　七
但裏綿共　御先練　七人

一、綾縞小袖　壱
但裏綿共　御中間御供組頭　壱人

右者今度　内府様　御任槐ニ付紅葉山　御宮幷惣　御霊屋江
被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御
納戸江御断被仰渡可被下候、以上

午二月　御中間頭　三名

（枠朱引）
摂津守殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織　壱　御中間御供組頭　壱人
但紐共　御中間目付　拾六人

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾壱　御中間押　五人△

一、黒絹単羽織　拾三　御中間　拾三人○

右者此度　内府様　御任槐ニ付紅葉山　御宮幷惣　御霊屋江被
遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為受取申度奉存候、御
細工所江御断被仰渡可被下候、以上

午二月　御中間頭　三名

△
此拾六人之内ニ　御膳上御能掛り弐人有之候

○
此拾三人之内ニ　御膳上御能掛り弐人有之候

内府様紅葉山　御宮江　御参詣ニ付御羽織願書

一、御供　弐人
還御之節
一、御裏御門御先附人　壱人

一、御側衆附　弐人
一、奥向御用　壱人

一、御小性衆附　壱人
一、御太刀御用　壱人

一、御納戸江出役　壱人
一、埋御門江出役　壱人

御装束
一、御長持附　壱人
御先廻り
一、両掛宰領　壱人

一、春慶御長持附　壱人

公方様蓮池御門江
一、御先見御附人　壱人　△

御任槐
一、御用掛　藤太郎　鉄（欽カ）助

数拾四
都合拾六

以上

午二月　御中間目付

△
此弐ヶ所文化十三子年四月　御参詣当朝差出ニ而相
勤候ニ付、此度も有之出方ニ而取調申候、已上

来ル廿四日　内府様紅葉山惣　御霊屋江　御参詣ニ付御先勤之
分奉願候
厳有院様　文昭院様
孝恭院様　有章院様
惇信院様
一、御霊屋江出役　壱　人　一、御霊屋出役　壱　人
一、御供所出役　弐人之内　壱　人　一、御橋出役　四人之内　弐　人
一、槐木下出役　壱　人　一、坂下御門外出役　弐人之内　壱　人
一、御目付衆附　弐人之内　壱　人
〆八ツ

西丸
御中間目付

二月廿一日

覚

今度　御転任　御任槐相済於西丸御能有之候ニ付、右御用取扱候様私共被仰渡候、且今般紅葉山　御同参之砌御羽織相渡候ニ付、右之御取調有之候節私共両人名面御書加被下候様致度、此段奉願候

但文化十三子年四月　御転任　御兼任之節本文御用取扱御小人方計ニ而御座候ニ付、其御頭方江名面書出相済申候

右之段奉願候、以上

二月

武井平六
増田熊蔵
御膳上御能掛り
松平左金吾

（朱書）
「五百十一」

文政八酉年二月

（枠朱引）
駿河守殿
内膳正殿
西丸御用
御台所江御断

細田小兵衛
御徒目付
大森大三郎
岡田大作
大久保熊次郎
御小人目付
木村十助
矢村藤太郎
三浦欽助
堀江亀之助
御使之者
増田熊蔵
武井平六
山崎富三郎

細田小兵衛
御中間
御小人
合弐拾五人

右者　若君様為御供扣罷出候間、日々朝夕御台所御夜食共被下候様御断被仰渡可被下候、以上

酉二月

御中間頭
御小人頭

西丸御用
臨時
御細工所江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織　壱　御使組頭　壱人
但紐共

一、黒加賀絹袷羽織　拾七　御中間目付　八人　御小人目付　九人

一、黒絹単羽織　五拾五　御中間　拾壱人　御小人　四拾四人

右者　若君様初而　御本丸江　御入之節御供之者江為着候ニ付、書面之通為請取申度奉願候、以上

酉五月

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

御小人頭
近藤鯉右衛門
木村嘉藤次
金井伊太夫

出火之節
若君様御供之覚

一、御中間頭　御小人頭　之内　壱人
但御中間頭・御小人頭壱人ツヽ、御供可仕筈御座候得共
公方様　御供も相心得罷在候間、左候而者六人共出払相成
内府様
御城御用之方差支申候間、書面之通壱人御供仕候心得御座候

一、御小人目付　四人　一、御小人押　四人　御長刀役

一、御草り取　弐人　一、御長刀一振　三人

一、御鑓五筋　拾人　一、御馬四疋　拾弐人

一、御鉄炮五挺　拾人　一、御貝挟箱壱　四人

一、御挟箱四走　拾六人　一、御台傘壱本　弐人

一、御雨傘壱本　弐人　一、御曲録壱脚　弐人

一、御床机壱脚　弐人　一、御手傘壱本　弐人

一、御蓑箱壱ツ　四人　一、御日傘壱本　弐人

一、御日覆壱ツ　四人　一、御雨覆壱ツ　四人

御持鑓之者　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人　御小人

一、御挑灯拾八張　弐拾人　一、高丸御挑灯六張　拾弐人

右者出火之節御供　内府様御供ニ准書面之通相心得候様可仕奉存候、依之申上候、以上

酉四月

御中間頭
御小人頭

左之書面西丸御使組頭より差越承付返却

西丸御徒目付組頭
黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
西丸御駕籠之者頭

出火之節　若君様御供心得方先達而差出候書面之通内膳正殿江相伺候処、伺之通り被仰渡候間此段可相心得候事

五月　細田小兵衛

大林弥一兵衛
鈴木宇右衛門
近藤鯉右衛門　承之

（枠朱引）
摂津守殿
壱岐守殿
西丸御用
西丸御台所江御断
覚
当月廿九日より来月六日迄朝夕夜食共　西丸御長屋御門番　増人共　三　人
同断　御同所奥表仕切土戸番　増人共　壱　人
右者御堀御用ニ付昼夜詰切不寐仕候ニ付、書面之通御台所被下候様御断被仰渡可被下候、以上
酉四月　御中間頭　古沢茂右衛門　鈴木宇右衛門　山崎又兵衛
（枠朱引）
摂津守殿
壱岐守殿
西丸御用
御挑灯奉行江御断　竹川善兵衛　野一色外記
覚
一、箱御提灯　四張　但棒共
一、蠟燭　四拾八挺　但弐拾目掛
右者御堀御用中西丸御長屋御門番・同御納戸口前御門番・同御台所口前御門番・同奥表仕切土戸番夜廻り相勤候ニ付請取申度奉存候、御挑灯奉行江御断被仰渡可被下候、以上
酉四月　御中間頭　三　名
若君様御弘後之御同参ニ付、請取物左之書面御扣共三通掛御徒目付小田切彦兵衛江差出
（枠朱引）
駿河守殿
臨時
御納戸江御断　羽太左京
覚
一、綾縞小袖　壱　御中間御供組頭　壱　人
但綿代金共壱両弐朱
右者来ル十七日紅葉山　御宮惣　御霊屋江　御参詣之節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上
酉三月　御中間頭　三　名
（枠朱引）
駿河守殿
臨時
御細工所江御断　羽太左京
覚
一、茶縮緬袷羽織　壱　御中間御供組頭　壱　人
但紐共
一、黒加賀絹袷羽織　拾六　御中間目付　拾壱人　御中間押　五　人
一、黒絹単羽織　弐拾　御中間　弐拾人
右者来ル廿七日紅葉山　御宮惣　御霊屋江　御参詣之節為着候

ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

御中間頭　三　名

西三月

三月十四日左之書面・御扣共四通掛り大森大三郎江差出

（枠朱引）
駿河守殿
内膳正殿
西丸御用
臨時
西丸御納戸江御断　細田小兵衛

覚

御中間御供組頭　壱　人

一、綾縞小袖　壱
　但綿代金壱両弐朱

右者来ル十七日紅葉山　御宮惣　御霊屋江　内府様　御参詣之節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

御中間頭　三　名

西三月

（枠朱引）
内膳正殿
駿河守殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断　細田小兵衛

覚

御中間御供組頭

一、茶縮緬袷羽織　壱
　但紐共

御中間目付　拾壱人

一、黒加賀絹袷羽織　拾六

御中間押　五　人

御中間　弐拾壱人

一、黒絹単羽織　弐拾壱

右者来ル十七日紅葉山　御宮惣　御霊屋江　内府様　御参詣之節為着候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

御中間頭　三　名

西三月

左之書面組頭より差出為心得留置候事

覚

公方様
内府様　御宮并惣　御霊屋江　御参詣被　仰出候ニ付

御中間目付　拾壱人分

一、黒加賀絹袷羽織

御中間押　七人分

一、同断

御持鑓役　五人分

一、黒絹単羽織

野方御使　五人分

一、同断

定式御供髪巻役共　拾人分

一、同断

御供組頭　壱人分

一、茶縮緬袷羽織

御供組頭　壱人分

御納戸江御断
一、綾縞壱反裏絹共
　綿代金壱両弐朱

西丸分
一、黒加賀絹袷羽織　御中間目付　拾壱人分
一、同断　御中間押　三人分
一、黒絹単羽織　御持鑓役　五人分
一、同断　野方御使　六人分
一、同断　定式御供髪巻役共　拾人分
一、茶縮緬袷羽織　御供組頭　壱人分
一、綾縞壱反裏絹共
　綿代金壱両弐朱
右之通御請取奉願候
三月　御供組頭

内膳正殿
肥後守殿
西丸御用
西丸御台所江御断
覚
西丸御長屋御門番　増人　壱　人
同御納戸口前御門番　増人　壱　人
同御台所口前御門番　増人　壱　人
同奥表仕切土戸番　増人　壱　人
右御旋御用中御能有之候ニ付増人差出候間、明六日朝夕御夜食共御台所被下候様御断被仰渡可被下候、以上

（朱書）
「文政十亥年」
亥五月　御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

（朱書）
「五百十二」
文政八酉年二月
覚
一、竹水鉄炮
右損御用立不申候、勿論相渡候年月も相分り不申候
但水籠無御座候
酉二月八日　御本丸奥仕切御門番
木村平兵衛
杉山万蔵
御本丸・二丸御中間御番所向水鉄炮・水籠請取不申候、以上
二月八日　御供組頭
左之書面二月十五日御部屋　を以差出
覚
奥表仕切御門御番所
一、竹水鉄炮　弐挺
右者損御用立不申候ニ付、去ル寅年中御引替被下候様仕度段書面差出候処御引替無御座候、右之外　御本丸御中間方御番所江水鉄炮受取置候御場所無御座候、以上
酉二月　御中間頭

左之書面小兵衛殿手扣ニ有之候趣ニ而諸向取調方近藤新吉より差越之

一、中之口番
延享四卯年六月より水籠三ツ・水鉄炮弐本御預有之候

一、御台所前番所
同年同月より水鉄炮弐本・水籠弐ツ御預有之候

一、奥仕切番所
同年同月より水鉄炮弐本・水籠弐ツ御預有之候

一、表火之番
同年同月より水鉄炮弐本御預有之候

左之書面高谷国次郎より差越之写置
追啓、御納戸口前御番所・御台所前番所・奥表仕切土戸番所有之候水籠之儀も見分為致候、勿論御中間頭江も其段申渡候、右新三郎殿書付伊織殿御下被成候、承付道永を以上ル、御番所通り御番所向心得申渡置候

近藤新吉
高谷国次郎

一、西丸大手御門渡御櫓下ニ入有之候火消道具損有無見分致し候様兵部少輔殿被仰渡候、右ニ付明後十九日四時為見分御徒目付・御小人目付差遣申候、尤雨天ハ日送り之積ニ候、且先達而差越候書付之内水鉄炮之儀ハ見分不致候

（朱書）
「五百十三」

文政十亥年四月

河内守殿
臨時
御納戸江御断
覚

一、熨斗目袷　七ツ
但裏絹共

御先練御中間
七人

一、綾島袷　壱ツ
但裏綿とも

御中間御供組頭
壱人

右者此度　御昇進ニ付上野・増上寺　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、已上

亥四月

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

河内守殿
（朱書）
「臨時」
御細工所御断
覚

一、茶縮緬袷羽織　壱ツ
但紐共

御中間御供組頭
壱人

一、黒加賀絹袷羽織　四拾弐

御中間目付
三拾四人
御中間押
八人

一、黒絹単羽織　三拾六

御中間
三拾六人

右者此度　御昇進ニ付上野・増上寺　御霊屋江被遊　御参詣節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥四月

御中間頭
三　名

（枠朱引）
壱岐守殿　西丸御月番
河内守殿　御本丸御掛り
西丸御用
（朱書）
「臨時」

西丸御納戸江御断
覚

細田小兵衛
加藤修理

一、熨斗目袷　七ツ
但裏絹共

御先練御中間
七　人

一、綾島袷　壱
但裏絹共

御中間御供組頭
壱　人

右者此度　内府様　御位階ニ付紅葉山惣　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、已上

亥四月

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

右御扣共四通

（枠朱引）
壱岐守殿
河内守殿
西丸御用
（朱書）
「臨時」

御細工所江御断

月番　細田小兵衛
加藤修理

一、茶縮緬袷羽織　壱ツ
但紐共

御中間御供組頭
壱　人

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾壱

御中間目付
拾六人

御中間押
五　人

一、黒絹単羽織　拾壱

御中間　△
拾壱人

右者此度　内府様　御位階ニ付紅葉山惣　御霊屋江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥四月

御中間頭
三　名

右御扣共四通

文化五午年者御中間拾三人請取、内弐人者西丸ニ而御膳上ケ御能掛り御中間・御使両人熊蔵・平六と申者有之候ニ付差加へ候得共、此度者御小人方計りニ付向方江相任セ此方者拾壱人ニ取調申候

年番　鈴木

下ケ札△

（枠朱引）
壱岐守殿
河内守殿
西丸御用
（朱書）
「臨時」
御細工所江御断
覚
月番　細田小兵衛
加藤修理
一、黒加賀絹袷羽織　拾六
御中間目付　八　人
御小人目付　八　人
御小人　弐拾六人
一、黒絹単羽織　弐拾六
右者此度　内府様　御位階ニ付紅葉山惣　御霊屋江　御参詣之節、御先出役之者共ニ為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、已上
（朱書）
「御先之儀　公方様　内府様　御同参之節者　御本丸勤之者より兼相勤候ニ付、別段御断差出不申候得共　御一方様　御参詣之節右出役西丸より差出候ニ付、本文之通御断申上候、已上
亥四月
御中間頭
御小人頭」
（文政カ）
文化五午之　御転任之節西丸御先勤之者羽織断
（枠朱引）
摂津守殿
玄蕃頭殿

西丸御用
（朱書）
「臨時」
御細工所江御断
覚
月番　桜井九右衛門
阿部四（澄）郎五郎
一、黒加賀絹袷羽織　拾六
御中間目付　八　人
御小人目付　八　人
御小人　弐拾六人
一、黒絹単羽織　弐拾六
右者此度　内府様紅葉山惣　御霊屋江　御参詣之節御先出役之者江為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候
（朱書）
「御先出之儀　公方様　内府様　御同参之節者　御本丸勤之者より兼相勤候ニ付、別段御断差出不申候得共　御一方様　御参詣之節者右出役西丸勤より差出候ニ付、本文之通御断申上候
午三月
御中間頭
御小人頭」
右御扣共四通
文政十年亥四月
両山　御参詣
御供人数書
御供組頭
公方様
内府様　御昇進　御位階被為　済両山　御参詣被　仰出候ニ付御清被下置候様奉願候、已上

御供人数書

一、御供組頭　壱人　茶縮緬袷羽織　壱ツ
一、御中間目付　三拾四人　黒加賀絹袷羽織　三拾四
一、同　押　拾三人　同断　拾三
一、御持鑓役　拾人　黒絹単羽織　拾
一、野方御使　拾人　黒絹単羽織　拾
一、定式御供　拾弐人　同断　拾弐
一、髪巻役　壱人　同断　壱ツ
一、加へ御使　三人　同断　三ツ
〆　黒加賀絹袷羽織　四拾七
黒絹単羽織　三拾六

内府様御分
一、御供組頭　壱人　茶縮緬袷羽織　壱ツ
一、御中間目付　拾六人　黒加賀絹袷羽織　拾六
一、御持鑓役　五人　黒絹単羽織　五ツ
一、野方御使　六人　同断　六ツ
〆　黒加賀絹袷羽織　拾六
黒絹単羽織　拾壱

御納戸江御断　御本丸分
一、綾島袷小袖　壱ツ　御供組頭　壱人
但裏絹共
一、熨斗目袷小袖　七ツ　御先練　七人
但同断
西丸御納戸江御断
一、綾島袷小袖　壱ツ　御供組頭　壱人
但裏絹共
一、熨斗目袷小袖　七ツ　御先練　七人
但同断

右者文政五午年三月　御転任之節御振合を以奉願候、已上
四月　御供組頭

内府様　御位階ニ付紅葉山惣　御霊屋江　御参詣ニ付御清奉願候
覚

一、綾島　但裏地共　御供組頭　弐反
一、綾島　但裏地共　御草履取役　四反
一、綾島　但裏地共　御小道具役　壱反
一、熨斗目　但裏地共　拾六反
御使組頭　弐人
亀井坊　壱人
内
御小道具役　九人
御使之者　四人
一、素袍繻子脚絆　亀井坊　壱具
一、麻上下　御草履取役　弐具
同断ニ付御役羽織奉願候覚
一、茶縮緬袷両面羽織　御使組頭　弐具
但紐共
一、黒加賀絹袷羽織　御小人目付　弐拾反
内三反御用掛り
一、黒加賀絹袷羽織　御玄関番　三反
一、黒絹単羽織　御小道具役　二十反
内二反御長刀役
一、黒絹単羽織　御本丸御用方　拾二反
御先出
一、黒絹単羽織　御本丸御使之者　弐反
附人
一、黒絹単羽織　御使之者　三拾八反

内御用方とも
一、黒絹単羽織　御触番　二十二反
一、黒加賀絹袷羽織　御用掛り御使　弐　反
右之通御座候、已上
四月　西丸御使組頭

上野惣　御霊屋江御参詣之節
一、御供　四人　一、同勢先　壱人
一、両掛附　壱人　一、表御道具附　壱人
一、奥御長持附　壱人　一、御丸弁当附　壱人
一、御装束御長持附　壱人　一、奥御道具附　壱人
一、御数寄屋水附　壱人　一、白木長持附　壱人
一、御秘箱附　壱人　一、傘世話　弐人
一、若年寄衆附　壱人　一、御側衆附　弐人
一、廻り物附　壱人　一、御老中・若年寄衆附　弐人
一、本防玄(ママ)関出役　拾人　一、中堂前　壱人
一、御装束所　壱人　一、文珠楼　六人
一、屏風坂　壱人　一、車坂　壱人
一、谷中口　壱人　一、新清水口　壱人
一、弐ケ所御霊屋　四人　一、弐ケ所二天門　弐人
一、弐ケ所御供所　弐人　一、御位牌所　壱人
一、御道見分　弐人　一、御先傘　壱人
一、御玄関前出役　壱人　一、御先勤当番所書役　壱人
一、掛り　七人　此外三ケ条加へ之廉有之候得とも除候旨申立候
一、御納戸銀　壱人　一、御鏡長持　弐人
一、御膳所より出候御長持　壱人
〆　六拾九人
右之通御座候、以上
四月　世話役　権九郎

近々紅葉山惣　御霊屋江内府様　御位階ニ付　御参詣御沙汰ニ付御羽織願書
一、御供　弐人　還御之節
一、御側衆附　弐人　一、御裏御門御先附人　壱人
一、御小性衆附　壱人　一、奥向御用　壱人
一、埋御門出役　壱人　一、御納戸口出役　壱人
御先廻り　一、御装束御長持　壱人
一、両掛宰領　壱人　春慶
御先勤　一、御長持附　壱人
一、御橋出役　五人　黒塗御紋附
一、御挟箱附　壱人
御先廻

御転任抜

［此処に挟込あり］

一、籠長持才領　壱人　一、御台所前出役　壱人
一、若年寄衆附　壱人　一、延寿木脇出役　壱人
数弐拾弐

御位階
一、御用掛　亀三郎
都合弐拾四　藤太夫　○
右之通ニ御座候、以上
西丸
亥四月六日　御中間目付

西丸当番所書役壱人加へ羽織受取度旨申出候得共、濡之訳ニハ訳も違候事故組込ハ承届不申旨定蔵を以申渡候、尤御当日濡願候程之雨天ニも有之候ハヽ、其節者勘弁も可有之旨御相談之通、是又定蔵を以申渡候

○

文政十亥年四月
内府様　御位階ニ付紅葉山惣　御霊屋江　御参詣御沙汰ニ付御羽織願書

一、御供　弐人　一、傘世話　壱人
一、御老中附　壱人　一、御数寄屋水　壱人
一、若年寄衆附　壱人　一、御小納戸衆附　壱人
一、格式衆附　壱人　一、御小性衆附　壱人
一、中之口出役　壱人　一、御玄関前出役　壱人
一、裏中之口出役　壱人　一、奥御長持附　壱人
西丸御広敷江申込　御先勤
一、御参詣　共　壱人　一、御橋出役　五人
還御

一、坂下御門外出役　弐人
数弐拾壱

御位階
一、御用掛　十助
都合弐拾四　宇八郎
四月六日　甚右衛門

西丸
御小人目付

御小人目付
木村十助
伊藤宇八郎
内田亀三郎
渡辺甚右衛門
仮役
金子庄次郎
三浦藤太夫代り
伊内甲太郎○
森紋三郎

藤太夫病気已前者本役五人・仮役弐人之由、此義も定蔵を以尋候処右之通ニ御座候、此仮役之儀祫ニ而請取度旨大久保熊次郎・大森大三郎より向三人江掛合文通有之候、是又向方江任可申存候

○

（朱書）
「五百十四」
文政十亥年十一月
御中間頭
御小人頭

来ル十一日紀五郎引移之節、御広敷御門より汐見坂御門・平川口御門通被相越候

一、右引移之節道筋　御城内御門々々ニ而人留・下座等ニ不及、往来之者不作法無之様心附、着服之儀者平服之積
右之通伺相済候間御広敷御門・奥表仕切御門・御太鼓櫓下御門・二丸御広敷御門右番人江可申渡事

（朱書）
「五百十五」
同年十二月
御中間頭
御小人頭江
溶姫君様御引移御道筋幷御見通ニ付別紙摂津守殿御渡候御書付写弐通、且御道書幷御道具参り候日割書付差遣候、組之者共江可相達事

十一月　鈴木九郎右衛門
溶姫君様御道具通り候於屋敷々々上下着候家来、熨斗目着候格之者江者常々熨斗目上下着さセ、外之者江者服紗小袖麻上下着さセ可申事
一、対之羽織着候足軽右之通為警固出し可申候、人数之多少者高ニ応し可為心次第事
一、御道具通り候節何れもつくはひ可申事
一、水桶ハ出申間敷事
一、往還人留候ニ不及候、但見物之者者払可申事
右御道具屋敷前通り候面々江可被相触候
十月
覚

一、溶姫様御引移御当日御道筋之長屋等窓蓋ニ者不及候、家来ハ御通り前まてハ出し置、御通り之節者引入可申事
一、御道筋手桶可出事
一、出置候家来、御道具参り候時之通熨斗目着格之者ニ者常之熨斗目上下、外之者江者服紗小袖麻上下、足軽江者対之羽織着さセ可申事
一、御引移御道筋江十五歳より上之男者不出、女者不苦候事
一、御道筋之屋敷大門ハ締小門者明ケ、門之外江御徒之者罷在門之内ニ者家来可差置事
一、窓之掛戸不仕翠簾掛ケ可申、内より見候分者不苦候事
右之通可被相触候
十月
溶姫様御引移
御道筋
平川口御門より一橋御門外、板倉伊予守屋敷前、松平英之助屋敷脇小川町通、水道橋御渡石川宮内屋敷前、牧野溜（鐚カ）吉屋敷前脇壱岐坂通、本郷弐丁目左江本郷六町目御住居表門
御供披道
松平加賀守屋敷南口門より左江、本郷春木町右江、金助町通左江、湯島六町目より神田明神前通神田旅籠町右江、筋違御門内松平伊賀守屋敷前脇通り右江、近藤石見守屋敷脇前、遠藤但馬守屋敷前、神田橋御門内酒井左衛門尉屋敷前、酒井雅楽頭屋敷脇前、大手御門
一、御道具参り候節も御道筋同断

溶姫君様御引移御道具参り候日割

十一月

十一日　初日　朝辰刻前
十五日　二日目　夕未中刻
十八日　三日目　同断

（朱書）
「五百十六」

文政十一子年正月左之御書付伊賀守殿被遣四役承付、西丸貫一郎承付取之口上添返却

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭　西丸共

若君様　御宮参之節御供御先勤・御役人・御番衆其外組々末々まて西丸方ニ而相勤不足仕候ハヽ　御本丸勤之者相勤候様相心得可申事

右之通伺相済候ニ付申達

正月

羽太左京
新見伊賀守
細田小兵衛
竹川善兵衛

若君様山王　御宮参之節下乗所

山王
一、表門前　下馬所
一、裏門前　同
一、小堀織部屋敷角
一、天野権十郎屋敷角
一、岡部美濃守屋敷角
井伊掃部頭宅江被為　入候節下乗所
一、松平安芸守家敷御堀端之方角　一、井戸（伊）掃部頭屋敷裏門下井戸之通
一、井伊掃部頭登　城門前　下馬所
一、松平河内守屋敷角　一、井伊掃部頭屋敷辻番所前
一、松平安芸守屋敷裏門前角

右之通下乗・下馬ニ相成申候、尤下乗・下馬相建候已後登城・退出之面々幷御用ニ而相通候者計相通し、平常之往来者相通不申候、依之申達候、以上

二月

羽太左京
新見伊賀守
細田小兵衛
竹川善兵衛

子三月十四日廻状写取

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

若君様　御宮参之節紅葉山・山王共御供相勤候面々者、御供揃刻限一時半早ニ　御本丸江相揃候事

一、紅葉山御供無之山王計江之御供相勤候面々も、前条同刻無遅滞西丸江相揃候事

右之通相心得御当朝罷出候ハヽ其段早々可申聞候事

三月

羽太左京

新見伊賀守
細田小兵衛

御徒目付組頭　西丸共

若君様　御宮参之節井戸掃部頭宅より　還御之節、御徒方一番払参候ハヽ当番同役江申聞、夫より頭取江申込候事

一、還御之節御目付方・御徒方御注進幷附人共不残当番所ニ而取扱御広敷江も申込候規定ニ候、尤御広敷御門外ニ奥御小人罷出居候事

三月　　羽太左京
新見伊賀守
細田小兵衛
竹川善兵衛

御徒目付組頭　西丸共

右者　御宮参之節紅葉山江御供被致西丸江被為　入候者、直ニ紅葉山より坂下御門通山王江罷越　還御後直ニ登　城被致候間、供廻之儀相心得候事

三月　　御側衆　四　名

御徒目付組頭　西丸共

一、御供御老中方・若年寄衆御駕籠台より御出被成候節、草履之儀者御駕籠之者差上候様可致候事
　但草履者奥より請取置可申事

一、御送り之御老中方・若年寄衆江御小人目付塀重御門外ニ罷在通御相済候得者塀重御門内江入草履上ケ可申事
　但右同断

三月　　四　名

来ル十八日　若君様　御宮参　還御之節、御小性・御小納戸・医師坂下御門外江御行列拝見罷出候ニ付、御小人新組壱組陰時計江相廻申込候事

三月　　四　名

一、薄縁　　四枚

右者　若君様　御宮参御途中御さし御用之節御駕籠之下江敷候ニ付、前日当番所江相渡候様御作事奉行江相達置候間、御畳奉行より請取御駕籠之者江掛合持人之儀可申談候事

一、掃部頭宅江御当朝相廻候釣台拾荷持人共幷御小人新組五組、為御用　還御相済候迄掃部頭宅江可差置候、右五組ニ而手足り不申候者同所御先出御使之内より相勤候様御使組頭江可申渡候事

一、紅葉山御先勤女中衆為案内御小人目付壱人、平日御三家方同勢入口門外江出し置、女中案内致方之儀者番之頭・添番江懸合可申事

一、御同所　御橋外ニ而御注進事不残取次、平日御三家方同勢入口門外ニ罷在候奥御小人江申込、右奥御小人名面承り置可申事

一、紅葉山　還御、西丸御裏御門　通御相済候者紅葉山ニ罷在番之頭江為相知可申事、右為知ニ而御先之女中坂下御門通山王江罷越候事

右之通可相心得事

若君様紅葉山　御宮　御参詣　御下輿之節、はきものぬかれ候処江刀を取置候、西丸大広間江被為　入候節塀重御門内ニ而も右同断、夫より山王　御宮　御下輿之節も右同断、右之刀早速持候儀ハ平日　御成之節御側衆刀持候御小人相心得候様能々申含置へく候事

三月　　四　名

若君様　御宮参之節、供奉之面々幷装束ニ而御供之分刀持紅葉山御参詣之節者中之口ニ差置、従夫西丸御納戸口江相廻、山王江　御成之節者御行列少人騎馬之跡江付引候而山王裏門内江入置　還御之節者又々　御成之節之通見計引出可申候事

三月　　四　名

若君様　御宮参之節御側衆刀持之儀者定式　御成之節之通差支無之様可差出候事

御宮参之節御注進幷附人之儀　羽太左京
奉伺候書付　新見伊賀守
細田小兵衛
竹川善兵衛

御宮参之節御注進幷附人之儀左ニ奉伺候

御本丸より　御注進
紅葉山江

一、御道具出候由　御小人方
紅葉山江
西丸

一、御駕籠被為　召候由　同断
同断

一、御駕籠被為　召候由　御供方
紅葉山江

一、蓮池御門より　同断
同断

附人　御小人方
御本丸江
西丸

一、紅葉山江被為　入候由

紅葉山より
西丸江　御注進

一、御駕籠被為　召候由　御小人方
西丸江

一、御駕籠被為　召　御徒方
西丸江

一、一之鳥居より　同断
同断

附人　御小人方
西丸江

一、西丸御裏御門内江御先見候由　同断
御本丸江

一、西丸江被為　入候由

西丸より
山王江　御注進

一、御駕籠被為　召候由　御小人方
山王江

一、御駕籠被為　召　御徒方
山王江

一、外桜田御門より　同断
同断

一、永田馬場より　同断
一、山王江被為　入候由　御小人方
　　御本丸
　　西丸江
　　掃部頭宅
　　山王より
　　掃部頭宅江御注進
一、御駕籠被為　召候由　御小人方
　　掃部頭宅江
一、御駕籠被為　召　御徒方
　　同断
一、永田馬場より　同断
　　附人　御小人方
一、掃部頭宅江被為　入候由　御本丸江
　　西丸
　　掃部頭宅より
　　御本丸江御注進
一、御駕籠被為　召候由　御小人方
　　御本丸江
一、御駕籠被為　召　御徒方
　　御本丸江
一、外桜田御門より　同断
　　附人　同断
一、下乗橋江御先見候由　御小人方
　　御本丸江
右之通御注進可申上候哉奉伺候、伺之通被仰渡候ハヽ御徒頭江も申談候様可仕候、以上

二月　四名

書面伺之通相心得御徒頭江も可申談旨被仰渡、承知仕候
三月八日　四名

〔注　この項において記載されている「」内の文字は（朱書）である。ついては表示の煩雑を避けるために、最初の「」の右横へは（朱書）と表示するが、それ以下は「」のみで括り右横への（朱書）表示は省略した。〕

御本丸より
紅葉山江御注進
（朱書）
「〇印此度新規廉増之分」
一、御道具出候由　御小人
　　紅葉山江　「御小人」
一、御駕籠被為　召候由　御小人
　　紅葉山江　「野方」
　　「〇」西丸江　「野方」
一、同断　御徒
　　紅葉山江
一、蓮池御門より　同
　　附人　同断
一、紅葉山江被為　入候由　御小人
　　御本丸　「野方」
　　「〇」西丸江　「野方」
　　紅葉山より
　　西丸江御注進
一、御駕籠被為　召候由　御小人
　　西丸江　「野方」

一、同断　御徒　同断
一、一之鳥居　同　同断
一、西丸御裏御門御先　御小人　西丸江　「御小人」
一、紅葉山より西丸江被為　入　御小人　「〇」御本丸江
西丸より　御注進
山王江
一、御駕籠被為　召　御小人　山王　「野方」
一、同断　御徒　同断
一、外桜田御門より　同　同断
一、永田馬場より　同　同断
一、山王江被為　入　御本丸　「野方」
西丸江　「野方」
山王より　掃部頭　「野方」
掃部頭宅江　御注進
一、御駕籠被為　召　御小人　掃部頭宅江
一、同断　御徒　同断
一、永田馬場より　同　同断
附人　御小人

一、掃部頭宅江被為　入　御本丸　「野方」
「〇」西丸　「野方」
掃部頭宅より　御注進
御本丸江
一、御駕籠被為　召　御小人　御本丸　「野方」
一、同断　御徒　同断
一、外桜田御門より　同　同断
附人　御小人　御本丸
一、下乗橋御先　一、御鑓　拾　人
一、御拋鞘　四拾人　一、少騎馬御供馬牽人　弐拾壱人
一、御供馬四疋　拾弐人　一、御先出御使　拾壱人
一、御注進　三拾三人
一、髪巻役　弐　人
〆百弐拾九　内弐ツ御注進之由ニ而減百弐拾七之内
三月十六日引分

三月十日西丸御小人目付世話役高津茂十郎・荒井利兵衛より書出し勤方廉書

紅葉山御供兼　御老中方
一、御供　四　人　一、刀世話　三　人
外ニ弐人掛り出し
一、御橋　拾　人　一、御神酒　壱　人
一、奥御長持　壱　人　一、御名代番　弐　人
一、御太刀御用　壱　人　一、御先番奥附　三　人

三組

山王
一、観理院玄関　拾人
一、奥御長持附　壱人
一、御太刀御用　壱人
山王下乗所
一、表門出役　壱人
御老中方
一、刀世話　壱人
一、傘世話　四人
掃部頭
一、玄関　拾人
一、御手水御用　壱人
一、拝見場所　○八人
出役四ヶ所
一、町人絵師　拝見場所　○弐人
一、御側衆附　書面之通り下り次第
西丸之方
一、御太鞁櫓出役　弐人
一、御納戸口出役　壱人
一、裏中之口　壱人
一、埋御門出役　壱人
御老中方御見送
一、草履世話　壱人

一、投米投銭　壱人
一、御神酒御用　壱人
一、御納戸御用　壱人
同下乗所
一、裏門出役　壱人
一、同勢先　壱人
一、御納戸御用　壱人
一、御腰物御用　壱人
一、御行列繰出　三人
御蟇目附
一、御箆刀附　○壱人
矢取役附　壱人
一、御台所前出役　壱人
一、中之口出役　壱人
一、御玄関前出役　壱人
一、当番所書役　西丸分　三人

御裏御門
一、御先附　壱人
掃部頭宅江被為　入候節
一、下乗所三ヶ所出役　三人
〆百九人
外
一、御老若方・御側衆附者人数　知不申候
一、御先出御小人之外掃部頭宅奥附五組、是ハ御頭江申上候事

六ヶ所
一、下馬所出役　六人
一、御宮参掛　但少人騎馬掛入不申　八人
一、御本丸分出役　御名代番其外出方ハ御本丸ニ而取調候事

御本丸御小人目付より勤候廉左之通書出ス

覚

一、御玄関前出役　弐人
一、御老若方附　拾人
一、堺重御門出役　弐人
一、御側衆附　五人
右之通御座候、以上

三月十日　世話役　小島東一郎

一、掛り御小人目付当日助　弐拾九人
右之通掛り入用之旨御小人目付前田彦十郎申聞候
右之通惣高相嵩候間、処々兼勤ニ致し　当番方七拾九　掛り之方二十四　合百三ツニ而
万事打返し相勤候様古沢より申談、三月十二日岩崎伝兵衛方江六人惣寄合相決談

御扣共三通り

上総介殿
臨時
西丸御納戸江御断

羽太左京
新見伊賀守
細田小兵衛
竹川善兵衛

覚

一、熨斗目小袖　弐拾三
但綿代共壱ツニ付金壱両弐朱充
内　七ツ　御中間方
拾六　御小人方

一、綾縞小袖　拾弐
但綿代共壱ツニ付金壱両弐朱充
内　三ツ　御中間方
九ツ　御小人方

一、麻上下　二具　御小人方

一、素袍袴繻子脚半　壱具　御小人方

右者　若君様　御宮参之節着申候ニ付請取申度奉存候、以上

子三月　御中間頭
御小人頭

御扣共三通外ニ別紙壱通添

上総介殿
臨時
御細工所江御断

羽太左京
新見伊賀守
細田小兵衛

竹川善兵衛

覚

一、茶縮緬袷羽織　七ツ
但紐共
内　三ツ　御中間方
四ツ　御小人方

一、黒加賀絹袷羽織　百四拾壱
内　百三ツ　御中間目付
御小人目付
弐拾六　御中間押
御小人押

拾弐　御小人
御玄関番

一、黒絹単羽織　弐百七拾壱
内　百弐拾七　御中間方
百四拾四　御小人方

右者　若君様　御宮参之節着申候ニ付請取申度奉存候、以上

子三月　御中間頭
御小人頭

別紙左之通認差出候得共御目付衆御手元限ニ而進達候ハ不相成、御沙汰等有之節御含御答有之様也

此度　御宮参之節御供・御先勤・諸出役ニ付、御中間・御小人出役人数之儀、寛政度ニ見合候得者余程相嵩候得共、此度者右之節共違ひ西丸江被為　入候廉も相増、右ニ付而者出役場所御注進幷附人等迄も余程相増当時ニ而ハ御老中方・若年寄衆・御側衆御人数等も多御座候ニ付、御附添其外内外御供差引等

仕候者迄も人数多罷成候ニ付、可成丈再応勘弁仕らセ兼合勤又者折返勤等為仕候得とも、御中間目付・御小人目付・御中間押・御小人押之分黒加賀絹袷羽織三拾六相増、御中間・御小人之分黒絹単羽織三拾壱相増候得共、最早此上減方も無御座候ニ付、別紙御断書面之通為請取申度此段奉願候、以上

子三月　　御中間頭
　　御小人頭

熨斗目裏綿共
三反　鈴木　　壱反　古沢　　弐反　山崎
羽織
三拾壱反　鈴木　　拾弐反　古沢　　拾九反　山崎
壱反　髪巻役　　七反　諏訪部定番　　八反　村松定番
　　内定式御供六反
四反　曲木定番　　三反　鶴見定番
〆
但内定番之分者組方之引分ニ不致、三組定番一同江申合、引方少人騎馬牽人も申合人数出候様定蔵江申渡

御徒目付組頭　両丸共
火之番組頭

若君様　御宮参之節、当番・詰番ニ而　御目見仕候布衣以上・以下御役人之儀者、大広間・四之間・御縁頰板縁江かけ並居、紅葉山　御宮江　御参詣之節幷井伊掃部頭宅より　還御之節、右両度　御目見仕候御番衆等詰所有之面々者　紅葉山江御参詣之節　御目見仕候面々与代り合、掃部頭宅より　還御之節右同所ニ而　御目見仕候事

一、内桜田御門通登　城之面々供廻　還御相済候迄、大手御門外ニ差置候事

一、西丸当番・詰番ニ而　御目見之布衣以上・以下御役人之儀ハ、西丸大広間・四之間・御縁頰板椽江かけ並居、西丸江被為　入候節幷山王江被為　成候節、右両度　御目見仕御番衆等詰所有之面々者代り合、山王江被為　成候節右同所ニ而　御目見仕候事

一、西丸江登　城之面々供廻和田倉御門外江差置候事
　但書　御目見之面々幷供立等之儀ニ付中略、末左之通

一、還御以後御供・御先勤之面々且当番・詰番之布衣以上・以下共吸物・御酒被下、御目見以下末々軽者江も御酒被下候ニ付、頂戴之分人数書一両日中拙者共方江御差出可有之候、尤西丸当番・詰番之分江者於西丸被下候事
　但　御目見以下躑躅之間・焼火之間ニ而役義被仰渡候向者、元御勘定所前廊下ニ而頂戴之積候得共右場所手狭ニ付、一役壱人充罷出致頂戴残候分幷其外末々軽者御賄所江人数書差出請取候事

右之趣伺相済候ニ付申達候事

三月　　羽太左京
　　新見伊賀守
　　細田小兵衛
　　竹川善兵衛

三月十八日上総介殿御渡、修理殿御達

若君様為　御宮参紅葉山　御宮夫より山王江被遊　御参詣候

還御之節、井伊掃部頭宅江被為　寄候間、可被得其意候

一、御本丸、西丸、奥表、御広敷共御清前々紅葉山　御宮　御参詣之節之通ニ候事

一、紅葉山江田安大納言殿・紀伊大納言殿・徳川右衛門督殿・松平加賀守・松平因幡守・松平越後守・松平三河守・御三家・庶流・越前家・溜詰御譜代衆・詰衆・四品以上之面々予参之事

一、紅葉山江御譜代衆・詰衆・御奏者番・菊之間縁頬詰其外出付候諸番頭・諸役人供奉行列直ニ山王江供奉、夫より掃部頭宅　還御之節も致供奉候事

一、山王江者水戸中納言殿・徳川兵部卿殿予参其外者予参無之事

一、翌日惣出仕之事候間　還御已後御機嫌伺使者差出候ニ不及候事

右之通被得其意向々江可被達候、四月十七日之通装束ニ而候事

覚

若君様　御宮参之節人数書左之通

一、御供組頭　三　人　一、御中間目付　御小人目付　七拾九人

一、御中間押　御小人押　弐拾六人　一、御持鑓役　拾　人

一、御抛鞘持　四拾人　一、御注進御使　三拾八人

一、定式御供　拾弐人　一、髪巻役　弐　人

一、少人騎馬御供馬牽人　弐拾壱人　一、御先出御使　拾壱人

〆弐百四拾弐人

右書付三月十七日御先勤・御供之分共人数書差出候様左京殿被申聞候段、蒔田又三郎申聞候旨御使組頭団次郎申聞、則別紙之通認出し候段定蔵申聞候旨古沢より申来、然処翌日又々人数書分り兼候旨鎌田長右衛門持参いたし候旨申来、一覧之処相違相見候事

当番・詰番とも之達書ニ而、近日可差出節者前書・廉書之内落候廉左之通入認可申事

一、御中間目付　御小人目付ニ而弐拾四　掛り之廉

一、御本丸　当番御用所　当番所書役共

西丸

一、当番御用所共

一、二丸当番

右中小目付之分

一、御本丸　御供扣　野方　四　人

一、御持鑓　六　人

一、御供組頭　壱　人

一、御長屋　三　人

一、新土戸　弐　人

一、奥仕切　弐　人

一、赤門　三　人

一、御太鞁　三　人

一、二丸赤門　弐　人

一、裏締戸　三　人

一、二丸御長屋　弐　人

一、二丸裏締戸　弐　人

一、二丸御台所脇　弐　人

一、西丸鑓　四　人

一、西野方　三　人

一、西御長屋　弐　人

一、西仕切　弐　人

同加番　壱　人

一、御納戸　弐　人

一、御台所前　弐　人

一、西奥御長屋　弐　人

右御使・其外番人之分五拾三人

内　九拾六人

御本丸　六拾五人

西丸　三拾壱人

（朱書）
「五百十七」
文政十一子年二月廿六日左之書面弐通・御扣共三通ツヽ、御徒目付石川三太夫江三役一同より差出、三月二日御納戸より請取

河内守殿
臨時
御納戸江御断
覚　羽太左京

一、熨斗目小袖　七
但裏綿共　御先練御中間　七人

一、綾縞小袖　壱
但裏綿共　御中間御供組頭　壱人

右者此度　御昇進ニ付紅葉山　御宮被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

子二月　御中間頭　三名

河内守殿
臨時
御細工所御断
覚　羽太左京

一、茶縮緬袷羽織　壱　御中間御供組頭　壱人

一、黒加賀絹袷羽織　二拾三　御中間目付　拾八人
御中間押　五人

一、黒絹単羽織　拾四　御中間　拾四人

右者此度　御昇進ニ付紅葉山　御宮被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

子二月　御中間頭　三名

同年三月朔日左之書面・御扣共四通西丸月番勝次郎殿江差出、翌二日御納戸より受取

御用番
御懸り
壱岐守殿
河内守殿
西丸御用
臨時
西丸御納戸江御断
覚　山岡五郎作
曲淵勝次郎

一、熨斗目小袖　七
但裏綿共　御先練御中間　七人

一、綾縞小袖　壱
但裏綿共　御中間御供組頭　壱人

右者此度　内府様　御位階ニ付紅葉山　御宮江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

子三月　御中間頭　三名

壱岐守殿
河内守殿
西丸御用
臨時
御細工所江御断

覚

月番　山岡五郎作
曲淵勝次郎

一、茶縮緬袷羽織　壱　御中間御供組頭　壱人
一、黒加賀絹袷羽織　弐拾壱　御中間目付　拾六人
御中間押　五人
一、黒絹単羽織　拾壱　御中間　拾壱人
右者此度　内府様　御位階ニ付紅葉山　御宮江被遊　御参詣
候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断
被仰渡可被下候、以上

子三月　御中間頭　三名

（朱書）
「五百十八」
文政十一子年二月左之書面被遣五役承付、当番所江差戻組頭藤四
郎江申渡候
明後十日上野　最樹院様　御霊前江　御参詣之節御装束所江
被為　成、御装束所ニ而御入側通被遊　御参詣候、御供建
場・開場　御目見場所幷御注進向等都而御定式　御参詣之節
之通ニ而候
一、法礼所（ママ）　御霊屋御程近ニ付本坊大広間板椽ニ御徒目付出役可
仕事
一、本坊玄関前東之方塀重門辺江供廻差置申間敷候、尤溜詰御老中
方・若年寄衆・御側衆供廻り同所西之方塀際ニ付差置、御徒
押・御小人押附切致差引物静ニいたし可申候、尤御徒目付・御
小人目付別段割方（朱書）（制歟）心得可申事
一、御装束所御入側通被遊　御参詣候ニ付、供奉行列等無之間御轅
幷亀井坊・白丁着之者此度者　御先江相廻り候ニ不及候事

子二月　金森甚四郎

（朱書）
「五百十九」
文政十一子年九月当番所小幡万兵衛相達五役承付御徒押江廻ス
来ル十一日
末姫君様
喜代姫君様　山王　御宮参之節
下乗所
山王
一、表門前
同
一、裏門前　下馬所
一、小堀織部屋敷角
一、天野権十郎屋敷角
一、岡部美濃守屋敷角

右之通下乗所・下馬所ニ相成候、尤下乗・下馬相建候以後登
城・退出之面々者相通、其外平生之往来ハ相通不申候
右之通可被心得候、以上
九月　鈴木九郎右衛門
曽根内匠

末姫君様
喜代姫君様　御宮参之節、御先勤幷御供御道筋江罷出候者服穢相
改可申候、尤山王　帰御之節より不及相改候事
一、御当日　殿中平服且服穢不及相改候事
右之通伺相済候、依之申達候事
九月　鈴木九郎右衛門
曽根内匠

来ル十一日
末姫君様
喜代姫君様　御宮参ニ付御供・御先勤共早々取調可被差出候事
九月　鈴木九郎右衛門
曽根内匠

末姫君様
喜代姫君様　御宮参之節御先勤・御供之面々江御酒・御肴被下候
旨摂津守殿被仰渡候事
九月　鈴木九郎右衛門
曽根内匠

末姫君様
喜代姫君様　山王　御宮参帰御之節西丸御先勤幷御供之分於西丸
吸物・御酒被下候　御目見以下江者御酒・御肴於西丸御台所被
下置、尤坂下御門内外ニ而相開、矢来御門外西丸春屋内ニ罷在
候御供之分江者右場所江相廻し頂戴之積之様伺相済候間申達候
事
九月　鈴木九郎右衛門
曽根内匠

来ル十一日
末姫君様
喜代姫君様　御宮参ニ付山王御先勤・御供・西丸御先勤其外諸御
用共人数之覚
一、御中間目付　合四拾壱人程
一、御小人目付
一、御中間押　合拾八人
一、御小人押
一、野方御使之者　拾三人
一、御小人御使之者　四拾六人程
一、黒鍬之者　御雇御広敷廻り　百五拾九人　表廻り諸御用　四拾八人程
右之通御座候、尤御小人御使之者之儀者御当朝迄御断相下り次第
人数相嵩候儀も候得共、先取調書面之通御座候、以上
子九月　黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭

（朱書）
「五百二拾」
文政十一子年四月左之御書付小兵衛殿被遣蒔田又三郎より差越、
両役承付団次郎江申渡ス
御中間頭
御小人頭

右者来ル廿九日より五月六日迄御㞁中往来幷供之者共等御㞁之方江附不申、西之方より片寄罷通候様制し、尤御㞁建候節往来立留候儀抔無之、別而制候様右御門々々番人江可申渡候事

御長屋御門番人
御納戸口御門番人
御台所前仕切戸番人
奥表仕切戸番人

一、右御門々々御㞁中致不寐夜中御場所相廻候様可致候、尤御長屋御門・奥仕切戸番人者増人致し都合三人ツヽニ而相勤候様可致旨、奥表仕切戸御番所掛り御小人目付弐人ツヽ泊候事
一、御㞁建・御道具建候御場所夜中大丸御挑灯相建候ニ付、御番所持場切ニ而右提灯可致世話候、尤火消候節表火之番立合之事
一、右番人五月朔日・五日・六日麻上下着用候様可申渡候事
○脱字有へし本ノマヽ
一、御㞁御用ニ付来ル廿九日幷五月○右両日御使之者拾人ツヽ可差出候事
右之通可申渡候、尤諸事去亥年御㞁建候節之通可相心得事
四月　山岡五郎作

（朱書）
「五百廿一」
文政十二丑年八月十日河内守殿御渡五郎作殿御達
来月十八日紅葉山・山王江　御宮参可被遊旨　被仰出候
右之通向々江可被相触候
八月

一、大納言様　御宮参之節御供幷御先勤其外共心得方都而去子年三月迄追々相達置候通可相心得候事
一、還御以後御酒被下候儀、是又去子年相達置候通相心得人数書早々可被差出候事
右之趣相達候事
八月

金森甚四郎
戸塚豊後守
細田小兵衛
竹川善之丞

覚

九月十八日　大納言様　御宮参之節人数書
一、御供組頭　三　人
一、御中間目付　五拾弐人　但掛り共
一、御中間押　拾三人
一、御持鑓役　拾　人
一、御抛鞘持　四拾人
一、御注進御使　三拾八人
一、御差出御使　拾壱人
一、定式御供　拾弐人
一、髪巻役　弐　人
一、少人騎馬御用意馬牽人　弐拾弐人
〆弐百三人

御本丸当番
御中間目付　拾七人
御門番　四拾八人

御持鑓役御用ニ付其外共
西丸当番　三拾壱人
〆九拾六人

当番　佐藤定蔵

右之通御坐候、以上　都合弐口〆弐百九拾九人

八月十五日

去子年三月　大納言様　御宮参被　仰出候ニ付、組之者着服同月十五日請取銘々相渡置候処、同廿三日当年者御延引来秋ニ至　御宮参可被遊旨被　仰出候間右着服其儘預置候処、右之内者追々他場所江御役出仕候も有之、病気ニ付隠居又ハ病死仕候者も有之、其外迚も両度之夏を越少給之者手置等も行届兼候故ニも可有御坐候哉此節見苦も罷成奉恐入候ニ付、何卒可相成義ニ御座候ハヽ当月十八日　御宮参之節着服新規受取着用為仕度奉存候、此段偏奉願度御内意奉伺候、以上

丑九月　御中間頭
御小人頭

右九月六日此方相談之上古沢より翌七日兼松江申談候処、同八日存寄無之旨御小人頭三人共申聞候由兼松申聞候ニ付、懸り御小人目付前田彦十郎江申談兼松同道ニ而甚四郎殿江差出、翌九日相預候而者不可然旨ニ而書面御返被成一覧不致積相心得可申候間、其方よりも差出不申積り相心得候様甚四郎殿豊後守殿御同坐ニ而被申聞候

左之書面九月十六日前田彦十郎江遣ス

九月十八日　大納言様　御宮参ニ付御酒被下候人数書

御中間頭　弐　人
御小人頭　弐　人
御小人目付　百拾三人
御中間　弐百三拾八人
内組頭三　人
御小人　三百三拾五人
内組頭三　人

右之通御座候、以上

九月

人数書

御中間頭
御小人頭

御中間　三拾壱人
御小人　四拾八人
黒鍬之者　拾四人
御掃除之者　四拾人

右之通御坐候、以上

九月

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

去月十八日　大納言様　御宮参之節御供人数書并井伊掃部頭宅

御先勤人数書取調一両日中可差出候事
十月　　金森甚四郎
　　戸塚豊後守

去月十八日　大納言様　御宮参之節御供人数
御中間頭壱人　御小人頭壱人　御中間御供組頭三人
御小人御使組頭四人　御中間目付弐拾九人　御小人亀井坊壱人
御中間押　御小人目付　御小人八拾六人
御小人押　拾八人　御中間百人
同断之節井伊掃部頭宅御先勤人数
御小人御使組頭壱人　御中間目付拾人　御中間押三人
御中間四人　御小人目付　御小人押三人
御小人御玄関番六人　御小人拾九人
右之通御座候、以上
丑十月　　御中間頭
　　御小人頭
右壱通御中間・御小人一紙ニ認、十月廿二日御小人目付前田彦十郎江遣ス

（朱書）
「五百廿二」
同年八月
御玄関番・中之口番其外何役たり共以来頭々見込候而可申付相当之者可被書出候、同役衆より名面を以推挙心附等致し候儀有之候共、此度改而拙者共申渡有之趣を以被相答不相当与被存込候者決而承知被致間敷候、畢竟組之者拙者共宅江も立入声懸り等自由ニ出来致、夫故心願向等致成就候様相成候而者組子も自ら頭を軽しめ、大勢御預申上指揮いたし候訳も立不申、頭々御役威も失セ御取締ニも抱り候事ニ候間、此旨申談候条厚く相心得一同江申通し候様可被致候、尤同役衆江も申達置候
右之趣甚四郎殿・内匠殿・帯刀殿御同座ニ而於小広間御口上ニ而、杉山八之助江被仰渡候
八月晦日
右之趣御中間頭・御駕籠頭・御掃除頭・黒鍬頭等江も同様申談置候様、是又被申聞候旨八之助より相達候事

（朱書）
「五百廿三」
天保三辰年九月
近々　大納言様番町御薬園より飯田町辺江被為　成候節
一、御道筋別紙之通ニ候事
一、御供方者西丸より相勤、不足之分者　御本丸より相勤候事
一、御行列者前々　大納言様　御城外　御成之格ニ而候事
一、御供衣服野服ニ而候事
一、人留幷御徒御道番、遠　御成之格ニ候事
一、御道筋御門々々当番之主人相詰　通御之節　御目見有之候事
一、町並見世商買物看板等其儘差置　御成之格ニ候事
一、御道筋幷　御見通之屋敷々々窓等之儀是亦遠　御成之格ニ候事
一、西桔橋より吹上御庭内通、半蔵江新御門より被為　成候ニ付、平常内御供西桔橋江相廻り候事
一、半蔵御門内御供建之儀者駒場野江　御成之節之通ニ候

一、御薬園江被為　入候節、御供御入口ニ而行形ニ開候事
一、御薬園江被為　入候ハヽ惣御供方新町壱番町通り罷越、三番町通馬場辺ニ相廻居、四番町御薬園江被為　入候ハヽ、御先御供之分田安御門外江相廻り居候事
一、御跡御供之分者　御立戻之節居付明地　御通抜之節外通致御供候事
一、九段坂上植木屋より中坂通　還御之節者御行列相建候ニ付、植木屋江被為　入候ハヽ御先御供之分中坂之方江相廻居候事
一、中坂通り町家等ニ而　上覧物有之候節者御供行形ニ下ニ居候事
一、吹上御鷹御門御供開方者　公方様前々御同所江被遊　還御候節之通ニ候
一、還御人払之御徒留切中矢来御門通　御本丸江罷越候間、通行之御門々々差支無之様可達置候事
一、還御御駕籠・御注進之者　御本丸当番所江申込候間、前々之振合可申込候事
　但矢来御門通罷越候間、是又通行之御門々々差支無之様可達置候事
一、吹上御鷹御門江被為　入候儀附人いたし西桔橋江可申込候、尤御供ニ廻り候御徒目付取次可申込候事
　但取次之者西桔橋ニ出居候
一、吹上御庭より西桔橋　還御之節者是又平常内御供相残、御鷹御門外ニ而開候　御城外御供之分者見計引取候事
一、半蔵御門より竹橋御門、田安・清水御門之往来　還御相済候迄者留切相成候間、吹上御庭江被為　入候　還御御間夕被為　在候節者田安・清水両御屋形、吹上役所江罷通候者者承紀相通候事
一、半蔵御門より竹橋迄留切相成候ニ付、吹上御先勤・両御番・御徒共無之候事
一、若年寄衆・御側衆其外御供之惣同勢西番所江差置　還御之節ハ雉子橋御門通り竹橋御門外相廻可置候、尤御徒目付差引可為致候事
一、諸事遠　御成之格ニ候事
右之通相心得達置可然ケ所江者可達置候事
九月　　大久保讃岐守
　　竹内五六左衛門

御道筋

半蔵御門より右江御堀端通壱番町御薬園　御通抜、四番町御薬園江被為　成、夫より御立戻、九段坂上植木屋栗戸門より被為　成、御同所江御立元飯田町中坂通俎板橋　御渡、九段坂より田安御門、田安殿屋形表門前通左江、吹上御鷹御門より御庭江被為　入候

（朱書）
「五百廿四」
天保八酉年九月
大和守殿
臨時
御細工所江御断　　大沢主馬
　　羽太庄左衛門

覚

一、茶縮緬袷羽織　弐　御中間御供組頭
但紐共　弐人

一、黒加賀絹袷羽織　四拾五　御中間目付　三拾七人
御中間押　八人

一、黒絹単羽織　四拾六　御中間　四拾六人

右者　将軍　宣下被為　済候ニ付、紅葉山　御宮幷山王　御宮且上野・増上寺惣　御霊屋江被遊　御参詣被遊(ママ)候節為着候ニ付、書面之通為受取申度奉存候、御断被仰渡可被下候、以上

酉九月　御中間頭　山崎又兵衛　伊倉為八　小野弥兵衛

大和守殿
臨時
御細工所江御断

大沢主馬
羽太庄左衛門

覚

一、茶縮緬袷羽織　壱　御中間御供組頭
但紐共　壱人

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾壱　御中間目付　拾六人
御中間押　五人

一、黒絹単羽織　拾五　御中間　拾五人

右者此度　右大将様御兼任ニ付、紅葉山　御宮江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

酉九月　御中間頭　山崎又兵衛　伊倉為八　小野弥兵衛

大和守殿
臨時
御納戸江御断

大沢主馬
羽太庄左衛門

覚

一、熨斗目小袖　七ツ　御先練御中間
但裏綿共　七人

一、綾縞小袖　弐ツ　御中間御供組頭
但裏綿共　弐人

右者此度　将軍　宣下被為　済候ニ付、紅葉山　御宮幷山王　御宮且上野・増上寺　惣御霊屋江被遊　御参詣被遊(ママ)候節為着候ニ付書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

酉九月　御中間頭　三名

大和守殿
臨時
御納戸江御断

大沢主馬
羽太庄左衛門

覚

一、熨斗目小袖　七ツ　御中間御先練
但裏綿共　七人

一、綾縞小袖　壱ツ　御中間御供組頭
但裏綿共　壱人

右者此度　右大将様　御兼任ニ付紅葉山　御宮江被遊　御参詣候節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

西九月　御中間頭　三名

大和守殿
主膳正殿

西丸御用
臨時

西丸御納戸江御断

覚

一、熨斗目小袖　七ツ　御中間御先練
但裏綿共　七人

一、綾縞小袖　壱　御中間御供組頭
但裏綿共　壱人

右者来ル十七日紅葉山　御宮江　公方様　右大将様　御一同　御参詣
還御以後　大御所様御行列ニ而被遊　御参詣候節為着候ニ
付、書面之通為請取申度奉存候、西丸御納戸江御断被仰渡可被
下候、以上

御中間頭　松平助之丞

西九月　三名

例書

一、明和二酉年四月
御神忌ニ付着物御断差出請取申候

一、天明七未年四月
将軍　宣下ニ付着物御断差出請取申候

一、文化十二亥年四月
御神忌ニ付着物御断差出請取申候

一、同十三子年四月　御転任　御兼任ニ付着物断差出受取申候

一、文政五午年三月　御転任　御兼任ニ付着物御断差出請取申候

一、同十亥年三月　御昇進之節着物御断差出請取申候

右之通御座候

（朱書）
「五百廿五」

天保十亥年三月六日御扣共四通ツヽ三通り西丸御月番江大久保熊
次郎を以差出

肥後守殿
主膳正殿

西丸御用
臨時

西丸御納戸江御断

覚

一、綾縞小袖　壱　御中間御供組頭
但裏絹綿代金共　壱人

月番　小出丹宮
渡辺小膳

右者当月廿八日　大御所様西丸江　御移徙之節為着候ニ付、書面之通為請取申度奉存候、西丸御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

亥三月

肥後守殿
主膳正殿
西丸御用
臨時

御中間頭
伊倉為八
小野弥兵衛
木村儀兵衛

御細工所江御断

月番　小出丹宮
渡辺小膳

覚

一、茶縮緬袷羽織　壱

御中間御供組頭
壱人

一、黒加賀絹袷羽織　弐拾七

御中間目付
拾七人

御中間押
拾人

一、黒絹単羽織　四拾壱

御中間
四拾壱人

右者当月廿八日　大御所様西丸江　御移徙之節為着候間、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥三月

肥後守殿
主膳正殿
西丸御用
臨時

御中間頭
三名

小出丹宮

御細工所江御断

月番　渡辺小膳

覚

一、黒加賀絹袷羽織　拾三

御中間目付
拾人

一、黒絹単羽織　拾壱

御中間押
三人

御中間
拾壱人

右者当月廿八日　大御台様西丸江　御移徙之節為着候間、書面之通為請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

亥三月

御中間頭
三名

（朱書）
「五百廿六」

天保十二丑年十月摂津守殿御渡、庄右衛門殿御達

諸向より申出候小普請ニ入候儀、御番方之面々其刻より十三ヶ月ヲ限り相頼候、十三ヶ月之外一両月も病気保養候ハヽ罷出相勤、其程ニ定有之候様ニ無是非願之儀申出候輩も可有之候間、頭支配方心得ニ而十三ヶ月之儀五六ヶ月も保養候而出勤罷成候様子候ハヽ、見合願差出候様向々江可相心得事

右之通享保三年被　仰出候処、近年右之月数より多引込罷在候者も有之、内実者罷在候（死去カ）而も小普請相願病死届延引致候を、保養為致候儀与心取違（得歟）致候類有之哉ニ粗相聞如何之事ニ候、享保之度被　仰出候者実々病気ニ而不得止事節之儀有之、且又死去を押隠御充行頂　戴罷在候者御後闇儀ニ而、先年御仕置被　仰付候儀も有之、旁向後心得違無之様可被致候

右之趣向々江可被達候
十月

（朱書）
「五百廿七」
同年十一月弾正少弼殿御渡金之丞殿御達、当番所阿久沢弥平次相達五役承付御徒押江廻ス
江戸・遠国共御普請御修復等之御用相勤候面々、御用中分限高を以被下候御扶持方之分都而本高之多少ニ不抱向後役高之割合を以可被下候
但国目付并大坂・駿府・長崎奉行或者所々減請取渡国々巡見、其外不時遠国為御用被差遣候御目付・御使番・御番方等只今迄之通分限ニ応し被下候
右之通向々江可被相触候
十一月

（朱書）
「五百廿八」
天保十四卯年七月左之書面三通御部屋栄喜を以差出
御中間目付
御小人目付 押込伺
覚

畔柳丈之進組
御中間目付 山崎孫三郎
柳田勝三郎組
御小人目付 近藤庄八

右者牧野遠江守鉄炮角場願ニ付取扱方不念之儀有之、不調法奉恐入申聞候、仍之押込置可申哉奉伺候、以上
七月廿三日
御中間頭 畔柳丈之進
御小人頭 柳田勝三郎

御附札
不及押込候、以来入念候様可被申渡候
右伊勢守殿被仰渡候段鐘次郎殿被申渡、書面鰭付返上

（朱書）
「五百廿九」
弘化元辰年八月廿七日勘三郎殿江御扣共三通・例書共上ル、十月三日御書取添御同人御渡致承付即日返上
主膳正殿
御本丸奥表御普請最寄勤番仕并夜中繁々見廻相勤候御中間・御小人御手当之儀奉願候書付
覚

桜井庄兵衛
中川勘三郎

御玄関番 御小人 三人
中之口番 同 四人
御長屋御門番 御中間 三人
御納戸口番

本文奉申上候、御中間・御小人日々勤番仕候者都合弐拾四人、昼夜入念勤番仕、御番所々々兼合相勤増泊も同様之儀ニ御座候間、別紙例書之趣を以一同江御手当扶持奉願候

御小人　弐人
新土戸番
御中間　弐人
御風呂屋口番
御小人　弐人
大奥塀仕切土戸番　○
御中間　弐人
大奥御台所前御門番
同　三人
御太鼓櫓下土戸番
御中間
御小人　打込　三人

○

右者御中間・御小人持場御番所々々江日々代り合相詰勤番仕候者共、此度　御本丸奥表御普請ニ付、諸職人・人足其外多人数致出入混雑も仕候処かさつ無之様制等念入、御役人方御通行之節者別而心附相制終日見張勤番仕、夜中者　御殿向御普請所御構外小屋々々・渡御櫓・御多門其外部屋々々共御普請所之分惣躰心附持場内繁々見廻仕候、且右番人共之内当時　御本丸・西丸・三ノ丸三ケ所御番所兼勤仕候者も有之、当五月炎上之砌より引続見廻り心附方等之義兼而被仰渡之通相守、一同出精相勤定式相詰候人数ニ而ハ手足り不申、増泊仕候間繁勤ニも罷成自然雑費相懸り少給之者共難渋仕候、右ニ付御時節柄奉願候も恐入奉存候得共、是迄精勤仕追而御普請御出来寄相成候事故数多成品諸色も持入、尚更無油断御締向厳重ニ相心得、早朝より極晩迄入念見張勤番致し夜中繁々見廻り仕候儀ニ付、可相成御儀ニ御座候ハヽ出格之訳を以前書人数之通勤番仕候者共江、何卒相応之御手当被下置候様仕度奉願候、則別紙例書相添此段偏奉願候、以上

辰八月

御中間頭
浅井七三郎
荒井林太夫
萩原又作
御小人頭
柳田勝太郎
志賀長十郎
榊原栄五郎

覚

書面日々増泊相勤候御中間・御小人壱人江一日米七合五勺ツヽ、勤日数を以御普請中御手当扶持被下候事

（朱書）
「五百三拾」

弘化二巳年八月十四日御畳奉行河合才兵衛江掛合、同十七日下ケ札致し御畳方より差越

御畳方
御掛り中

御中間頭
荒井林太夫

此度　御本丸御普請御出来ニ付御中間方御番所々々其外御畳敷面増減有之候御場所幷西丸・二丸共是迄畳数相違之分共相改申候、尤御畳相減候御番所幷御持鎗之者部屋等ハ惣躰御中間元部屋之儀ニ而多人数出入致し自然御畳御保方不宜、実々難儀之御場所者板敷等見込薄縁壱枚相増請取候様致度候、且畳数増減之ケ所有之候得共敷面之儀ニ付別段願下（ママ）りニ無之候共御取計ニ

御差支無之候哉、則別紙御断下書を以御示談仕候、御左右次第例年之振合を以御断進達書面御達差出可申与奉存候、此段御懸合仕候、以上

巳八月

御書面御中間方御番所其外畳・薄縁之儀元敷面与引合取調候処、下ケ札之通　御本丸之方ハ増減無之、西丸之方相減候儀故別段御進達にも及不申、例年之通御振合ニ而御進達有之御差支無之候、尤仕来之通畳・薄縁共見分之上損之分抜替出来候様可致候、此段及御答候、以上

巳八月　　御畳方

下ケ札

同日御作事下奉行加藤治右衛門江左之趣及懸合候処、別紙之通御断差出候而も差支無之旨同人申聞、尤西丸江も相達置候旨、是又申聞候事

御作事方
御掛り中　　御中間頭
荒井林太夫

此度　御本丸御普請御出来ニ付而者御中間方御番所々々部屋々々障子員数増減御場所も有之候付、両丸御番所部屋々々共相紛候処、障子張替候員数別紙御断下書之通御座候、御差支之儀も無御座候ハヽ右取調候趣を以例年之通当巳十一月ニ至御断書面御達差出可申与奉存候、此段御懸合仕候、以上

巳八月

同日小普請方鈴木分左衛門江左之趣及懸合候処、下ケ札いたし同廿日同人より差越候

小普請方
御掛り中　　御中間頭
荒井林太夫

此度　御本丸御普請御出来ニ付而者御中間方御番所々々障子員数増減之御場所も有之候ニ付、西丸・二丸御番所々々障子張替之分共別紙御断下書之通取調申候、御差支之儀も無御座候ハヽ例年之通当巳十一月ニ至り御断書面御達差出可申与奉存候、此段御掛合仕候、以上

巳八月

御書面御掛合之趣致承知候、差支之儀無之候、此段御答およひ候

巳八月　　小普請方

主膳正殿
定式
御作事方江御断
覚

月番　山口内匠
本多隼之助

一、御持鑓之者部屋　　拾七畳
薄縁弐枚

右之通畳損候ニ付御畳方見分之上御修復御坐候様仕度奉存候、以上

巳八月

御中間頭
浅井七三郎
荒井林太夫
萩原又作

御作事奉行衆
御中間方御番所畳替之覚

一、御長屋御門御番所　七畳半
一、同所二階　八畳
一、新土戸御番所　五畳　薄縁弐枚
一、大奥御台所前御門御番所　五畳半
一、同所二階　九畳
一、同裏締戸御番所　六畳　薄縁壱枚
一、御太鼓櫓下土戸御番所　五畳　薄縁弐枚
一、大奥塀仕切土戸御番所　六畳　薄縁壱枚
一、二丸御長屋御門御番所　八畳
一、同御台所脇御門御番所　四畳半　薄縁壱枚
一、同新御長屋御門御番所　四畳半　薄縁壱枚
一、同御広敷御長屋御門御番所　四畳半
一、同裏締戸御番所　三畳　薄縁壱枚

右之通畳損候ニ付、御畳方見分之上御修復有之候様御畳奉行江御断可被下候
右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳八月

山口内匠
本多隼之助

下ケ札
〆九拾三畳半　敷面ニ引合三畳減
〆拾壱枚　同　三枚増

御作事奉行衆
御中間方御番所幷部屋障子張替之覚

一、御長屋御門御番所　半障子四本
一、同所二階　半障子四本
一、新土戸御番所　障子三本　半セうし弐本
一、大奥塀仕切土戸御番所　障子四本　半障子弐本　障子弐本　半障子三本
一、御持鑓之者部屋

右者例年之通障子張替有之候様御作事方江御断可被下候
右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳八月

主膳正殿
玄蕃頭殿

西丸御用
定式
御作事方江御断

一、西丸御持鑓之者部屋　九畳　薄縁壱枚

右之通畳損候付、御畳方見分之上御修復御座候様仕度奉存候、以上

巳八月　御中間頭　三名

御作事奉行衆
御中間方御番所畳替之覚

一、西丸御長屋御門御番所　五畳　薄縁壱枚
一、同御納戸口前御番所　四畳
一、同御台所口前御門御番所　四畳半
一、同奥表仕切土戸御番所　四畳半
一、同大奥御長屋御門御番所　七畳
一、同所二階　九畳
一、同裏締戸御番所　三畳　薄縁壱枚

右之通畳損候ニ付御畳方見分之上御修復有之候様御畳奉行江御断可被下候

右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳八月

下ケ札
〆四拾六畳　敷面ニ引合半畳減

御作事奉行衆
御中間方御番所并部屋障子張替之覚

〆三枚　同弐枚半減

一、西丸御長屋御門御番所　障子三本　半障子弐本
一、同御納戸口前御門御番所　障子弐本
一、同御台所口前御門御番所　障子壱本
一、同奥表仕切土戸御番所　障子三本　半障子弐本
一、同御持鑓之者部屋　障子弐本　半障子弐本

右者例年之通障子張替有之候様御作事方江御断可被下候

右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳十一月

小普請奉行衆
御中間方御番所障子張替之覚

一、大奥御台所前御門御番所　障子三本　半障子七本
一、同裏締戸御番所　障子壱本　半障子五本
一、御太鞁櫓下土戸御番所　障子弐本　半障子五本
一、二丸御長屋御門御番所　障子四本　半障子四本
一、同御台所脇御長屋御門御番所　障子壱本　半障子三本　障子壱本

一、同新御長屋御門御番所　半障子三本
一、同御広敷御長屋御門御番所　半障子三本
一、同裏締戸御番所　障子壱本　半障子弐本

右者例年之通障子張替有之候様小普請方江御断可被下候
右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳十一月

小普請奉行衆
御中間方御番所障子張替之覚

一、西丸大奥御長屋御門御番所　障子壱本　半障子九本
一、同裏締戸御番所　障子壱本　半障子弐本

右者例年之通障子張替有之候様小普請方江御断可被下候
右之通御中間頭申聞候ニ付御達申候、以上

巳十一月

（朱書）
「五百卅一」

弘化四未年十一月

主膳正殿

熨斗目幷綾縞小袖来申年分請取之儀
御納戸江御断　月番

覚

一、熨斗目小袖　七ツ　御先練御中間　七人
但壱ツニ付綿代金壱両弐朱ツヽ之積
一、綾縞小袖　壱ツ　御中間御供組頭
但綿代金壱両弐朱　壱人

右者例年正月より　御成之節為着候趣を以是迄毎暮請取来候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡隔年請取之積ニ而当未年分者相減請取不申候ニ付、来申年分書面之通請取申度奉存候、以上

未十一月

御中間頭
浅井七三郎
荒井林太夫
杉野甚平

手桶・掻器其外受取之儀
御賄方江御断　月番

覚

一、手桶　切蓋共　拾弐新規
一、掻器　拾弐本新規

右者拾弐ヶ所御中間方御番所江毎暮請取候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡隔年新規請取之積、去午年相減請取不申候ニ付、当暮書面之通請取申度奉存候

一、青縁取　六枚引替
一、莚　八枚引替

右者御長屋御門御番所江毎暮之通請取申度奉存候、以上

未十一月　御中間頭　三名

次棕櫚箒請取之儀
御細工所江御断　月番

覚

一、次棕櫚箒　　拾弐本新規

右者拾弐ヶ所御中間方御番所江毎暮請取候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡隔年新規受取之積、去午年相減請取不申候ニ付、当暮書面之通請取申度奉存候、以上

未十一月　　御中間頭　三　名

主膳正殿
玄蕃頭殿

西丸御用
熨斗目幷綾縞小袖
来申年分請取之儀
西丸御納戸江御断

覚　　月番

一、熨斗目小袖　　七ツ　　御先練御中間　七　人
　但壱ツニ付綿代金共壱両弐朱ツヽ之積

一、綾縞小袖　　壱　　御中間御供組頭　壱　人
　但綿代金共壱両弐朱

右者例年正月より　御成之節為着候趣を以是迄毎暮請取来候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡候砌、五ヶ年目請取之積申上候処、去々巳年十二月中隔年受取之積尚又伺相済、当未年分者相減受取不申候ニ付、来申年分書面之通請取申度奉存候、以上

未十一月　　御中間頭　浅井七三郎
荒井林太夫
杉野甚平

西丸御用
手桶・掻器請取之儀
西丸御賄方江御断

覚　　月番

一、手桶　切蓋共　　七ツ新規
一、掻器　　七本新規

右者西丸御中間方御番所七ヶ所江毎暮請取候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡隔年新規請取之積、去午年相減受取不申候ニ付、当暮書面之通請取申度奉存候、以上

未十一月　　御中間頭　三　名

西丸御用
次棕櫚箒請取之儀
御細工所江御断

覚　　月番

一、次棕櫚箒　　七本新規

右者西丸御中間方御番所七ヶ所江毎暮請取候処、去ル卯年十二月中減方被仰渡隔年新規請取候積、去午年相減受取不申候ニ付、当暮書面之通請取申度奉存候、以上

未十一月　　御中間頭　三　名

（朱書）
「五百三十二」
安政元寅年　日御月番江御部屋久悦を以差出ス
但馬守殿

御勘定所江元御断　　月番　大久保市郎兵衛
　　永井岩之丞

覚

一、油合壱合五勺　　正月晦日迄
　但灯心共　　壱夜分

一、同　壱合三勺　　二月朔日より
　但同断　　壱夜分

右者此度為御用弁御玄関前御多門江仮部屋弐ヶ所取建、御小人目付・御使之者増泊り為仕候ニ付、当正月十五日より書面之通弐ヶ所分御用相済候迄日々請取申度奉存候、御勘定所江元御断被仰渡可被下候、以上

寅正月　　御中間頭
　　御小人頭

但馬守殿

臨時
御細工所江御断返　　月番　永井岩之丞
　　遠山金四郎

覚

一、網掛鉄行灯　　弐ツ
　但小道具共

右者為御用弁御玄関前御多門江仮部屋弐ヶ所取建、御小人目付・御使之者増泊為仕候ニ付、書面之通受取置候処御用相済候間返納仕度奉存候、此段御細工所江御断返被仰渡可被下候、以上

寅三月　　御中間頭
　　御小人頭

但馬守殿

御勘定所江御断　　月番　永井岩之丞
　　遠山金四郎

覚

一、油八升八合八勺　　正月十五日より同廿九日迄一夜ニ付七勺五才ツヽ、二月朔日より三月廿一日迄一夜ニ付六勺五才ツヽ
　但弐ヶ所分

右者当正月十五日より為御用弁御玄関前御多門江仮部屋弐ヶ所取建、御小人目付・御使之者増泊為仕候ニ付、当三月廿一日迄御用中書面之通弐ヶ所分日々受取申候、此段御勘定所江御断被仰渡可被下候、以上

寅三月　　御中間頭
　　御小人頭

同年三月廿五日

御作事奉行衆

覚

中間目付
御小人目付　合　五　人
御使之者　五　人

右者為御用弁当正月十五日より当分之内増泊為仕候処、御小人目付・御使之者部屋手狭ニ付御玄関前御多門続小細工方持之場所、仮部屋ニ取建請取置候処御用相済候ニ付、此段御作事方江御断返可被下候

右之通御中間頭・御小人頭申聞候間申達候、以上

三月　　永井岩之丞

覚

前同断

右同文言ニ付略之　　前同断
三月　　御中間頭
御小人頭

（朱書）
「五百卅三の上」
同年七月十七日御掛り一色邦之輔殿江差出ス
但馬守殿
来ル廿二日増上寺
御掛り
一色邦之輔
御参詣之節御中間・御小人着物
御納戸江御断
覚

御中間御供組頭　壱人
御使組頭　弐人
亀井坊　壱人
御日傘役　壱人
御参内傘持　壱人
御草履取　五人
御先練
御中間
御小人
合　弐拾弐人

一、染帷子　三十三

右者来ル廿二日増上寺　御参詣ニ付為着仕候間、書面之通請
取申度奉存候、以上
寅七月　御中間頭

同年閏七月　日
来ル十七日紅葉山
御参詣之節御中間・御小人羽織
御細工所江御断
覚

御中間御供組頭　壱人
松本十郎兵衛
一色邦之輔

一、茶縮緬両面袷羽織　三
但紐共
御使組頭　弐人
御中間目付
御小人目付
合　弐拾弐人

一、黒加賀絹袷羽織　三十四
御中間押
御小人押
合　拾人
御玄関番　弐人
御中間
御小人
合　百壱人○

一、黒絹単羽織　百壱

右者来ル十七日紅葉山　御宮江　御参詣之節為着仕候ニ付、
書面之通受取申度奉存候、以上
寅閏七月　御中間頭
御小人頭

下ケ札
御車副机（ママ）木持・随身机木持罷出候ニ付
人数相増申候
○

同日
来ル十七日紅葉山
御参詣之節御中間・御小人着物
御納戸江御断
覚

松本十郎兵衛
一色邦之輔

御中間御供組頭　壱人
御使組頭　弐人
亀井坊　壱人
御日傘役　壱人
御参内傘持　壱人
御草履取　三人
御先練
御中間
御小人合　弐拾弐人
亀井坊　壱人
御日傘役　壱人
御草履取　壱人

一、染帷子　三十一
一、素袍袴繻子脚半　壱具
一、麻上下　弐具

右者来ル十七日紅葉山　御宮江　御参詣之節為着仕候ニ付、書面之通受取申度奉存候、以上

寅閏七月

御中間頭
御小人頭

但馬守殿

二月二日山王　御参詣之節
御中間・御小人羽織
御細工所江御断

覚

一、茶縮緬両面袷羽織　壱　御中間御供組頭　壱人

御使組頭
御中間目付
御小人目付　合　三人
御中間押
御小人押　合　五拾三人
御玄関番　弐拾六人
御中間
御小人　合　八人
百六拾七人

一、黒加賀絹袷羽織　五十三
一、黒絹単羽織　六拾六

（朱書）
「書面羽織人数書之内当月十七日紅葉山　御宮江　御参詣之節為請取候分相用、不足之分取調員数書面之通御断申上候」

右者二月二日山王　御参詣之節為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉存候、以上

寅閏七月

御中間頭
御小人頭

（朱書）
「此下ケ札之儀中小多坪（ママ）ニ而下ケ札有之候間右ニ泥書面差出候覚」

覚

一、茶縮緬両面袷羽織　壱　御使組頭　壱人
御中間目付
御小人目付　合　三拾壱人

○
一、黒加賀絹袷羽織　五十三

御中間押　合
御小人押　拾六人
御玄関番　六　人
御中間　合
御小人　六拾六人

一、黒絹単羽織　六拾六
（朱書）
「書面羽織之儀当月十七日紅葉山　御宮江
御参詣之節為受取候分相用、不足之分取
調申上候」
右者二月二日山王　御参詣之節為着仕候ニ
付、書面之通受取申度奉存候、以上
寅閏七月　御中間頭
御小人頭

（枠朱引）

覚

一、茶縮緬袷羽織　四
但紅葉山　御参詣之節三人分
受取、残壱人分此度受取

御中間御供組頭　壱　人
御使組頭　三　人
御中間目付　合
御小人目付　五拾三人
御中間押　合
御小人押　弐拾六人
御玄関番　八　人

一、黒加賀絹袷羽織　八十七
但紅葉山　御参詣之節三拾四人分請取
残五拾三人分此度受取

御中間押　合
御小人押　百六拾七人
御玄関番　百壱人分請取
御中間　合
御小人　百六拾七人

一、黒絹単羽織　百六拾七
但紅葉山　御参詣之節百壱人分請取
残六拾六人分此度受取
右之通御座候
寅閏七月　御中間頭
御小人頭

此朱釣点者御勘定宮田文吉与申者御中間頭江面談いたし度旨
申聞候間引合候処、山王　御参詣ニ付御供組頭壱人ニ而相勤候
哉之旨尋ニ付、是者全く不足之分受取三人ならてハ勤不申旨答
候処、右御断書面ニ而者不分明ニ付認メ呉候様申聞候間、朱釣
点之通半切壱通物ニ而遣し候処早速相済、尤本文御断直し不申
其儘相成居、向後見合ニ不残留置候事

（朱書）
「五百卅三の下」
同年十月　日組役月番和田卯十郎江渡、御作事奉行遠山隼人正江
持参、同人用役江相渡受取書取之
一、切支丹宗門従前々無懈怠今以相改申候、先年被　仰出候御法度
書之趣遂僉議候、御預り之組中并私共家来ニ至迄切支丹紛敷も
の無御座候、依之銘々寺証文取置申候事
一、此以後組中并私共家来等迄切支丹怪敷者御座候者早々可申上
候、為其仍如件
安政元寅年十月
御中間頭
伊藤次兵衛○書判
松永半六○同
外山和太夫○同

堀伊豆守殿
遠山隼人正殿

（朱書）
「五百卅四」
安政二卯年十一月
「御納戸頭衆
覚
御中間着物
一、綾縞　壱反
裏綿共代金ニ而受取可申候
一、熨斗目七反之内　三反
裏綿共御品ニ而請取可申候
一、熨斗目七反之内　四反
裏綿共代金ニ而受取可申候
右之通御納戸頭江御達可被下候
卯十一月　御中間頭
三名
右之通御中間頭申聞候間御達申候、以上
卯十一月　一色邦之輔
松平久之丞

（朱書）
「五百卅五」
安政五午年六月左之御断弐通　御参詣者無之候得共見合ニ留置
来ル　日紅葉山　御参詣之節、御中間・御小人着物
御細工所江御断　津田半三郎
駒井左京
覚
一、茶縮緬袷羽織　三　御中間御供組頭
一壱人

但紐共
御使組頭
一弐人
御中間目付合
御小人目付合
一弐拾弐人
御中間押合
御小人押合
一拾弐人
御玄関番
一三人
御中間合
御小人
一、黒加賀絹袷羽織　三十七
一、黒絹単羽織　八拾九
八拾九人
右者　日紅葉山　御宮并惣　御霊屋江　御参詣之節為着仕候
ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下
候、以上
午六月　御中間頭
御小人頭

（朱書）
「五百卅六」
同年六月　日
（朱書）
「臨時」
日紅葉山江　御養君様　御参詣之節、御中間・御小人着物
御納戸江御断
覚
御中間御供組頭
「壱人
御使組頭
一弐人
御日傘役

一、染帷子　三十一

一壱人　御中間目付合
御参内傘持　一壱人　御小人目付　拾弐人
御草履取　一壱人　御中間押合
亀井坊代り　御長刀役　一壱人　御小人押　拾人
御先練　御中間　御小人　合　「弐拾弐人」　御中間合　六拾六人
御日傘役　壱人
御草り取役　壱人
亀井坊代り　御長刀役　壱人

一、麻上下　三具

右者　日紅葉山　御宮幷惣　御霊屋江　御養君様　御参詣之節為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

午六月　御中間頭　御小人頭

（朱書）「臨時」

日紅葉山江　御養君様　御参詣之節、御中間・御小人着物御細工所江御断

覚

一、黒加賀絹袷羽織　二十二

一、黒絹単羽織　六拾六

右者　日紅葉山　御宮幷惣　御霊屋江　御養君様　御参詣之節為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

午六月　御中間頭　御小人頭

例書

天明元丑年閏五月十八日　御養君様被　仰出、同廿一日紅葉山　御宮江　御参詣之節御供相勤候御中間・御小人江御清服被下置候

午六月　御中間頭　御小人頭

（朱書）「五百三十七」

同年八月　日御扣共三通

（朱書）「臨時」

御出棺御用　御納戸江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織　三　（ママ）　三
但紐共

御中間御供組頭　壱人
御使組頭　弐人

御掛り　御名
御中間御供組頭　「弐人」
御使組頭

一、染帷子　七十三

同御草り取役　八人
御中間　弐人
御小人　拾人
五拾壱人
御中間御供組頭　弐人
御使組頭　六人
御草履取　弐人

一、麻上下　十具

右者　御出棺　御葬送為御用書面之通為請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

午八月　御中間頭
御小人頭

御出棺御用
御細工所江御断
覚

御懸り
御名

一、白衣　百九十八

御中間　拾人
御小人　百八拾八人

右者　御出棺　御葬送為御用書面之通為受取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

午八月　御中間頭
御小人頭

（朱書）「五百卅八」

同年九月廿八日御掛り御目付松平弾正殿江御内意相伺候処、御聞済ニ付同廿九日御断差出、尤前日ニ付御断相下り候而請取候而者間ニ合不申候間、仮御断差出し即日受取夫々相渡候事

野々山鉦蔵
松平弾正

御納戸江御断
覚

御中間御供組頭　壱人
御使組頭　弐人
御日傘役　壱人
御草り取役　三人
御参内傘持　壱人
御先練　御中間　七人
同断　御小人　拾五人
亀井坊　壱人
御日傘役　壱人
御草履取役　壱人
亀井坊　壱人

一、綾島小袖　八
但綿代金壱ツニ付
壱両弐朱ツヽ之積

一、熨斗目小袖　二十三
但綿代金一ツニ付壱両弐朱ツヽ之積

一、麻上下　二具

一、素袍袴繻子脚半　一具

右者来ル晦日紅葉山惣　御霊屋江　御参詣之節御供之者江為着候ニ付、追而　将軍　宣下被為　済両山　御参詣之節請取

物之内只今引上請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

午九月　　御中間頭
　　御小人頭

（朱書）
「五百三十九」

嘉永五子年十二月

西丸奥表御普請所最寄勤番仕候
御中間・御小人御手当之儀奉願候書付

覚

西丸御玄関番
御小人　三人
同御長屋御門番
御中間　弐人
同中之口番
御小人　弐人○
同御納戸口前御門番
御中間　弐人
同御台所口前御門番
同　弐人
同御風呂屋口番
御小人　弐人
同奥表仕切土戸番
御中間　弐人
同御広敷御長屋御門番
同　弐人

右者御中間・御小人持場御番所々々江日々代り合相詰勤番仕候者共、此度西丸奥表御普請ニ付諸職人・人足其外多人数出入有之混雑も仕候ニ付、制等入念御役人方通行之節別而心附相制終日見張勤番仕、夜中ハ　御殿向御普請所御構外惣躰心附持場内繁々見廻り仕、当五月西丸炎上後よりハ西丸・二丸弐ヶ所御番所江勤番仕候ニ付、定式相詰候人数ニ而ハ手足不申人数相増泊等仕候間繁勤ニも罷成、自然雑費相掛り少給之者とも難渋仕候、右ニ付御時節柄奉願候も恐入奉存候得共是迄精勤仕御普請御出来寄ニ相成候事故、猶又無油断御締向厳重ニ相心得早朝より極晩迄入念見張勤番致、夜中繁々見廻仕候儀ニ御座候間、可相成御儀ニ御座候ハヽ出格之訳を以書面之通日々増勤番仕候者共、何卒相応之御手当被下置候様仕度、別紙類例相添此段偏奉願候、以上

子十二月

御中間頭　三名
御小人頭　三名

○下ケ札

本文奉申上候御中間・御小人日々増勤番仕候者都合拾七人、昼夜詰切相勤候ニ付、別紙類例書之趣を以御手当扶持奉願候

（朱書）
「五百四十」

嘉永六丑年八月五日

西丸濡御手当願差出方之儀、御駕籠頭より御同所御部屋江問合候処、以来西丸若年寄衆分御扣者除キ三通ツヽ差出候様永江次郎右衛門より御使之者を以申越候事

（朱書）
「五百四十一」

安政元寅年十二月

向井将監

御目付衆

一、御駕籠船附　　弐艘
一、中艢　是者御道具船附　　弐艘
一、中艢　是者御次船附　　壱艘

右者川筋　御成之節、御船江乗余り御人数之分右役船江乗船ニ而差出来り候得共、此度御改正被　仰出候ニ付而者右人数之内を陸廻しニ相成申間敷哉、左候得者右役船之儀も減方ニ相成申候間、此段及御掛合候

寅十二月晦日

右壱通当番所渥美又兵衛差越候間御供組頭栄作江申談置候、是者御小人方専一ニ付助左衛門江大村より申談候処、差支之旨当番所江相答候由申聞候事

（朱書）
「五百四十二」

嘉永四亥年二月　日

杉野甚平様　　近藤勝平
外山和太夫様　　加瀬綺（崎）十郎

喜多野省吾様　　藤村権左衛門

以　手紙啓上仕候、然者御目付支配無役平島三郎左衛門儀、先祖御中間江被　召抱代々御中間相勤罷在候儀ニ付、別紙之通願出候間刻印附竪物壱通并由緒書相添御廻し申候、右得御意（度脱カ）如此御座候、以上

亥二月

杉野甚平
外山和太夫
喜多野省吾

近藤勝平様
加瀬綺十郎様
藤村権左衛門様

御紙面拝見仕候、然者御目付支配無役平島三郎左衛門儀、別紙之通願出候に付願書・由緒書共御廻し被遣一覧仕候処、先祖御中間江被　召抱候家筋之者ニ付一旦御小人相勤候得共、此度隠居家督被　仰付候ハヽ御中間江御入人相願度趣承知仕候、右之通相成候而も其御方御差支無之候ハヽ、於拙者共存寄無之候間其段無役世話役江御申談可被下候、右其趣得御意度如此御座候、以上

亥三月

別紙

御目付支配無役
平島三郎左衛門

以書付奉願候覚

私先祖平島三郎左衛門儀　　台徳院様御代年号不知、畔柳助九郎組御中間江被　召抱、曽祖父多忠太迄四代御中間相勤、祖父三郎左衛門御目付支配無役之節、安永九子年十一月御小人江御入人被　仰付父・私迄御小人相勤候得共、先祖御中間江被召抱候家筋ニ御座候間、此度養子被　仰付上家督被下置候ハヽ、

何卒御中間江御入人被　仰付被下置候様仕度、此段親類加判を
以奉願候、以上
嘉永四亥年二月
平島三郎左衛門　印
西丸御玄関番
従弟之続　内田栄蔵　印
近藤勝平殿
加瀬綺十郎殿
藤村権左衛門殿
小林久次郎殿
高野武左衛門殿
山崎嘉吉殿

（朱書）
「五百四十三」
嘉永元申年十一月二日能登守殿江差出、同五日左之御書取添御下
ケ即日承附返上
嘉永元申年十月中浅井七三郎方江無役隠居指田新十郎願出候
処、組内仕痒之趣厳敷相答候ニ付、同人儀戸田能登守殿願書持
出、是迄組々より養子懸合候処、表向ニ左之通御同人江相伺
組之者養子幷縁組其外共掛合之儀是迄私共より一切他向江掛
合差出不申先方より掛合有之及挨拶来候処、此度浅井七三郎
組御中間指田順之進儀男子無御座候ニ付、続者無之候得共御
留守居佐野日向守同心石川源吾次男彦次郎儀養子仕度双方熟
談仕候ニ付、其段願出先方よりも日向守江願書差出有之掛合
を待居候処養子遣候方より掛合与申儀者無之、何れニも貰ひ
方より掛合有之相当ニ付掛合遣し候儀難成旨日向守より申渡
有之候、私共ニ而も前々より遣し方・貰ひ方ニ不拘掛合遣不
申候間其段申渡候処、此節ニ至り甚当惑難渋仕候旨申立候、
是迄迚も右掛合一条ニ付而者差支不都合之義茂有之候間、以
後時宜ニ寄私共より懸合遣し候様仕度候、依之此段奉伺候、
以上
申十一月　五役之頭

御書取
別紙伺之趣無余儀筋ニ相聞候間、以後其時宜ニ寄此方より
懸合可被申候

書面伺之趣者御書取之通被仰渡承
知仕候
十一月五日　五役之頭
役名

右之通ニ候得共組方之儀者矢張是迄之通養子貰方其外時宜ニ寄
此方より懸合いたし候得共、御目付衆者御用多故他向江五役組
之者縁組貰方・遣シ方共御懸合者無之積り、此方より者懸合差
遣し候積り、先御目付衆ニ准し多分差遣方より懸合参り候様組
之者江先是迄之通申渡候方ニ差含居候事

（朱書）
「五百四十四」
安政五午年十二月　日
御目付衆

林大学頭
林図書頭
林民部
学問所下番見習
岡村勇吉

右勇吉儀今廿七日父勇次郎跡式被下置御支配無役入越中守殿被仰渡候ニ付御引渡申候、尤勇吉儀父勇次郎病死之節忌明之上引続下番見習為相勤候段者越中守殿江申上置候儀ニ有之候、依之及御掛合候

午十二月

御書面勇吉儀父跡式被下置直ニ無役入越中守殿被仰渡候ニ付御引渡受取申候、尤勇吉儀引続下番見習勤越中守殿江被御申上置候段承知仕候

午十二月　御中間頭　矢村斧右衛門

同年十二月廿七日御部屋より御下ケ、翌廿八日下ケ札いたし御部屋友和を以返却

御目付衆　林　大学頭　林　図書頭　林　民部

今度各方御支配無役入ニ相成候岡村勇吉儀学問所下番無足見習相勤居候ニ付、父病死後跡御入人之儀不申上其儘明ケ置候故、此節勇吉を直ニ学問所下番江御入人相願可申与存候、御存念御座有間敷哉及御掛合候否御報可被御申聞候、以上

十二月

下ケ札

御書面岡村勇吉儀父跡式被下置直ニ無役入被仰付、御引渡相成候上ハ無役入之手続相済候上ニ而、学問所下番江御入人御申上相成候而も差支之儀無御座候

午十二月　御中間頭　矢村斧右衛門